
君と湖で…

大橋結菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と湖で…

【Zコード】

N7185A

【作者名】

大橋結菜

【あらすじ】

小さな頃に両親を亡くした15歳の少年、ヘルゼーは普通の少年。ある日ヘルゼーは仕事で裏山へ行くことになった。そこで一人の少女シルフィーと出会う。そして、ひょんな事からシルフィーの旅に同行することになったヘルゼーだったのだが……

プロローグ

この世界は今から約2000年前。まだ魔法が当たり前のように使われ、現代人にも解けないような計算し尽くされた機械じかけの世界の話。

しかしこの世界は発展しすぎたため領土や権力をめぐつての争いが絶えず、このレスカーナの土地はいまや荒廃しきっていた。

また、戦争による肉親の死、友人と永遠の別れへの悲しみ・憎しみ・うらみから人々の心には悪魔が巢くい生きる活力や精神力をうばわれ人々は疲れはて、生きる気力をも無くしていた。

まさに世界は滅亡へのカウントダウンに入ったようなものだった。

第1話 旅立ちの夜明け（前書き）

1話から長くなってしまったが、やっと始まります。これからよろしくねがいします！！

第1話 旅立ちの夜明け

カトアニア共和国
B175番地図
南東エリア

一人の少年は今、寂しげな朝を迎える。彼の名前はアトベア・ヘルゼー。真っ白な髪に、今ではめずらしい青く澄んだ大きな瞳。少しそばかすの多い丸みをおびた鼻にはまだ小さな子供の雰囲気が残っている。色は白め。頼りない肩には、まだ昨日着ていた赤いチヨッキがそのままたれさがっている。

152

一息ついた彼の姿はまさにわんぱく少年といったところか。緑の短パンに、少しだけ大きめのブーツにいた靴。そして青のシャツ。（赤のチョッキはその場に脱ぎ捨てた。）

彼に両親はない。彼は戦争で親を無くした。つまり“孤児”だ。今の世界には彼のような子供はいくらでもいる。彼のような15、6歳の子供でも遊んでばかりはいられない。一日きつちり働いて、もらえる金額はたったの1・2ショート（日本円で120円）やつと一日分のパンとバターが買える程だ。朝食を済ませ、彼はやつとある一つの重大な事に気付く。

- え ? 「

彼は、…今初めて時計を見た。
普段の仕事をはじめる時刻は9：00、そして只今10：30。

「う
虚だろオオオオオオ！」

ドタバタと着替え、髪の寝癖も直さず通りへと駆け出した。

「やべえ… そうでなくとも、今日は大切な仕事の日なのにつ」

約5分。寝坊したのはバレバレだ。

人目も気にせず走り込みセーフ　のはずがない。突然大きな壁
いや、腹に激突する。ハレン・カルブアード監督官の大きく出た

腹だ。

「アトベア・ヘルゼー！」

大声で呼ばれ、彼は更に状況が悪くなつた事に気付いた。

「最悪だ… よりによつて監督官にぶつかるなんて…」

「何か言つたかね？アトベア・ヘルゼー君。」

「い…いえ何も。」

彼が硬直しながら答えると

「何も言つてないだと？！… 1時間35分28秒も遅れておきながら、私に言つことばが何もないと君はいうのかね？！…」（きこえでなかつたのかよつ）とかなんとか思いながらもヘルゼーは一応謝つた。否。できなかつた。

「すいませ…」

「もちろん君の先程の発言も聞こえているがね…」

（こやみなやつ…）
そう思いながらもヘルゼーは自分を作つた。

…

「すみません監督官。昨日の無礼をお詫びしようと思つ夜遅くまでゴレを作つていたもので、ついつい寝坊してしまつたのです。」

そういうしながら、ヘルゼーはあるものを取り出した。

ヘルゼーが取り出したモノは監督官が唯一気をよくする品。

郷土料理・アドニクト。肉の一種だが、脂肪分が少ないうまい鴨肉を調理し、包み焼きにしたものだ。

「ほう。」

監督官は「ゴクリ」と唾を呑んだ。

特にヘルゼーが作るアドニクトは子供達の中でも群をぬいてうまい。きっとこの辺ではヘルゼーの右に出るものは一人たりともいないだろ。それに今回の出来はヘルゼーの中でもよくできたと思つほつだ。

「ふん、初の遅刻だしな。まあよしとしてやろう。それに今日は客が遅れてる、運がよかつたな。そのまま表に出て裏山にある花畠へ行け。手入れをして客を迎えるのだ。」

「はい、わかりました。ありがとうございます。」

そう言い残すと、ヘルゼーは飛び出し、急いで裏山にむかった。

取り残された監督官がむなしく言った。

「「」のアドニクトを食べれるのもコレが最後かもしねんな…」

第1話 旅立ちの夜明け（後書き）

感想・意見などなど頂けると嬉しいです。2話目からからはキャラ
が一人ずつ登場しますのでお楽しみに。

第2話 黒衣に身をまといつ少女（前書き）

今回はとても長くなってしまった。更新もおそらくすみません！

第2話 黒衣に身をまとつ少女

「はあ…はあ…はあ」

息を切らせながらヘルゼーは裏山の急な坂道を登つていた。

「な…んで…いつつも…こん…なに…ふうつ…急なんだ…！」

！――！」

文句を叫び汗だくになりながらなんとか頂上に登つた。

「ゼ…は…こんなとこに用のある客つて、どんな人なんだろ？？」

一面の花畠。ここは、この世界では欠かせない魔法や生活用品で使われる“玉”を作り出す特殊な花が植えているところだ。“玉”とは（きょく）と呼ばれ、“玉”そのものではあまり使用されず何らかの形に加工されてから皆の手元に届く。みんながみんな、魔力に長けていれば“玉”をいちいち加工するなんて面倒なことはしない。魔力がありさえすれば“玉”をそのままの形で持たせても変形させて自由自在に使えるからだ。

いや、むしろ加工されたものを使うより“玉”そのままのほうが軽くて持運びに便利だし使用者が思い描き、願つたものになるから別々に分けて使う必要が無く、便利である。しかし“玉”的変形は使用者の魔力を恐ろしく消費するため、特殊な訓練を受け、さらにもともと魔力をためやすい体质でないと扱うことは難しい。だからわざわざ手間をかけて加工するのだが、その“玉”そのものが欲しいというひとはなかなかないため、ヘルゼーは少し興味があつた。監督官の言つていたとおり、まだ客は来ていなかつた。先にこの花畠の管理人にあいさつをした。

「じーちゃん！こんちは！オレだよ、ヘルゼーだ！」

血のつながつた祖父ではないが、ヘルゼーと管理人は実の親子の様な親しさだつた。

「おう、ヘルゼー。よくきたの。あの坂はきつかったろう？。今日

ここに呼んだのはな、ヘルゼーに会いたいと言つてゐる者がおつての。じやがいくぶん待ち合わせの時間に遅れているようじや。すまんが、草むしりでもしてまつとつてくれんか？」

頼りにされるのは嫌じやないヘルゼーは素直に

「わかつたよ。」

といつて草むしりをはじめた。いつのまにか15分以上時間がたつていたらしい。ヘルゼーは一つのことにも没頭しやすいタイプなのですっかり花畠の8割を綺麗に片付けてしまつた。

「おーい！ヘルゼー！お客さんがいらしたぞ～」

やつと我にかえつたヘルゼーが出来るかぎりの大声で返事をした。

「わかつたよ～今いく～！」

ヘルゼーが戻つてくるまでの間に客人が管理人に一言告げた。

「本当に彼、孤児なんですか？とても見えない…」

確かに孤児というものはたいていすねたり、さみしがりやになつたりと、内向的になる者が多いが、ヘルゼーは違つた。いつも明るく純粋。素直でおせつかいだつた。もちろん弱者を助けるタイプ。小さい子はほつとけない。いつもなにかと面倒をみてしまうため、小さい子達からは厚い信頼を手にしていた。「あの子は強い子じやよ。無論、貴女には及ばないけどね。」

「それほどたいしたものもありませんよ？」

そういう話をしているうちにヘルゼーが近づいてきたため、話は中断された。

一方、ヘルゼーは例のお客さんが気になつてしかたなかつた。

（僕に会いたいなんてどんなひとなんだろつ。）

近づいたびにわかつてくる客の外見。

服は黒、ブーツも黒。

肌は色白、女の子だ。髪が……黒？！黒とはめずらしい！魔法の事をあまり知らないヘルゼーでさえ知つてゐる程有名な話だ。

髪の色は黒が一番魔力をためやすいのだ。

魔力に恵まれてゐるんだなあと思ひながら、自分の髪をみて少しが

つかりした。白い髪は一番魔力をためにくいからだ。わかってはいたけどねえ……。彼女にもう少し歩み寄つてみると瞳の色は紫がかつていた。きっとこの女の子は魔力をためやすい体质なんだな……なんて思いながら彼女をみていると管理人にどやされた。

「何ぼさつとしとるんじや？ 挨拶ぐらいせんかい！」 管理人にどやされてよかつた。ヘルゼーは我にかえつた。

「あつ……えつと、はじめてまして、僕はアドベア・ヘルゼーと申します。」

「はじめまして、私はカトレア・シルフイーと申します。」

そして、ヘルゼーは单刀直入にきいた。

「あのつ！ 僕に用事つてなんですか？」

「玉の採集を手伝つてほしいの。玉は採る人によつても多少の変化があるからね。あなたみたいに純粹な人に採られるのが一番いいのよ。」

果たして僕は純粹なのはなぞだつたが、仕事なのでとりあえず必要事項を尋ねた。

「どんな玉をお探しですか？」

僕らみた的な孤児は何かと位が下にみられてしまいがちだから、初対面の人には特に気を使う。もし、差別的主觀のある人だつたら僕はきっと簡単に職をなくしたり、その場で投げ飛ばされてしまう。女だつて魔力では絶対に勝てる気がしなかつた。そんな予想をよそに彼女はさらつと言つた。

「旅の準備でね、私一人ではとうてい集めきれない量でね。色々と必要だから……」

そう言つた彼女の横顔は少し悲しげだつた。

「いいですよ。どんな玉をお探しですか？」

と悲しげになつた顔のことはあえて聞かなかつた。誰にだつてあることだ。暗い過去なんて。もしかしたらこの子も孤児かもしれない。そしたら深く聞く事は失礼に値する。この世界の常識だ。

「えつと、地図に利用できるもの。それから能力を写し取れるもの。

あとは魔法へ転用、再構築できるものがいいわ。採り方は知つてゐるわよね？」

「え？ ただ採ればいいだけではないのですか？」

少し驚いた質問だった。が、彼女は僕以上に驚いていた。

「なつ今までそんな採り方をしていたの？ よく花が傷まなかつたわね。」

そー言つと彼女は彼女の採り方で採りはじめた。

「玉の花は纖細だからまず実を押さえる。そして軽くひねるの。そうすると花の軸を傷めずに、綺麗にとれるわ。」

いつもしている方法だつたがあえて言わないでおいた。彼女の気をそこねてはいけない気がしたからだ。そんなこんなで採取しているうちにヘルゼーは思った。旅をしながらでも自然の玉は採れるし各地に玉の名産地は山ほどあるものだ。ヘルゼーは話を聞いてみることにした。

「あの… 何故ここで全ての玉を集めるのですか？ 旅に必要な玉は旅の途中で集めれば荷物にもならないのです。」

「この土地ほどいい玉が作れる所は世界中探してもきっと見つからないわ。ここに玉には心がこもつていて。特に玉の成長に一番重要な優しさや愛情がね。」

「そなんですか？」

「見かけでは判断できないからね、コレばっかりは。」

そしてヘルゼーは彼女に一番聞きたかったことを聞く事を決意した。先程から彼女は魔法関係の事しか話していない。それも、一般人の常識の範囲を明らかに越えた知識を持っている。そして、ヘルゼーには少しばかりだが心当たりがあつた。

「あの… 違つたら申し訳ないのですが、もしかして討悪師ではないですか？ この旅ための玉の種類にしてもそうとしか思えない。」

彼女は本当に驚いた顔をしてこちらにふりむいた。

「なつ… 何故討悪師を知つているの？？！」

「両親がいつも語ってくれました。この戦争が意味の無いものだと
いつもこと。そして、戦争によってうまれてくる邪悪な感情、悲しみ、
憎しみ、恨み。これらの邪惡なる心を完全に浄化することのできる
唯一の存在。討悪師。両親は討悪師を尊敬していました。」

「そうだったの。それなら知っていてもおかしくはないわね。その
通り、私は討悪師よ。知っている人はおろか今だに尊敬していく
れた人がいるなんて驚きね。」

彼女は納得したように採取に戻った。そしてヘルゼーは自分でも思
いもよらない言葉を発していた。

「あのつ！……！」

「ん？」

「僕を旅に同行させて頂けませんか？？」

「は？」

もちろん当然の言葉だった。そして彼女は急に顔が冷たくなった。
「一つ聞かせてもらうけど、それは単なる憧れ？それとも工場で下
働きさせられている現状から逃げたいから？討悪師と知つていてこ
んなことを言う人を見たのは初めてよ。それにご両親から聞いてい
るでしょう？旅の目的とその末路。一緒に居ても何の得にもならな
いわ。」

末路？そんなの聞いたことが無い。

「違います、僕はただ世界をみてみたい。僕は生まれてから国はお
ろか、この街からすら出たことが無い。それにあなたの方の仕事の事
をもつとよく知りたい！」

「ダメね。」

速答だった。答えるまで0・2秒（勘）

「世界をみたいとか言つたわよね？」

「はい！」

「あなたのいるこの街が今、一番安全かつ綺麗だわ。この意味はい
ずれ解ることよ。世界なんて知らなくつたつて生きていける。悪い

ことは言わない、やめておいたほうがいいわ。私と居てもむなしくなるだけよ…」

いつもの温厚なヘルゼーならここで留まっていただろう。でも今日は違った。

「そんなことない！僕はいつか世界に出て本当に人の役に立つ仕事がしたいとずっと願っていた！お願い！」

そういった時だった。ヘルゼーが意識する迄もなくたまたま持っていた玉が形を変形させていた。変形した形は剣。まさに今のヘルゼーの勢いを表したような大きな剣だ。鍔の所にしっかりと玉が納まっていた。彼女は信じられないというような顔をして絶句した。

「あ…あなたソレ？！何処で身につけたの？玉を攻撃用の武具に加工するなんて修業しなければ身につけられない高等技術よ？！」

そう言わわれてはじめてヘルゼーは玉の形が変わっていることに気がついた。

「あつあれえ？！」

本人が一番驚いていた。そして彼の様子をみて、シルフィーの頭のにすごい推測が浮かんできた。（この子もしかして無意識のうちに玉の変形・加工をしたというの？！もしこの推測が本当なら…）

そんな彼女をよそに彼は剣を玉に戻そうと必死になっていた。

「こんなのは初めてだよ。何で？！戻つてよ！」

「戻さなくていいのよ…。」

彼女は静かに言った。

「え？」

「戻さうと考へなくていいの、用がすめば結果がでれば、自然と玉にもどるわ。」

そして彼女は言った。

「まさか玉の変形を修業もぜずに行なつてしまつとはね。正直、驚きよ？いいわ。気が変わった、旅に連れていくてあげる。あなたには世界を見て現状をしる。学ぶ権利があるみたい。」

「

「ほ… 本当…！」

「もちろん。玉の採取が終わつたらすぐに出発の準備して、みんなにもあいさつしなきやだしね。！おつと玉はもうほとんど集まつたから先に行って用意していいわ。待ち合わせ場所は中央広場ね。なるべく早くね。」

「はい！…ありがとうございます！…」

「それとその敬語、やめてくれる？？変だよ。歳もそんなに変わらないのに。」

「わかつたよ！本当にありがとうございます！…」

ヘルゼーは勢いよく山を下りていつた。上り出見せた顔とはまったく別。まさに生き生きとしていた。

そんなヘルゼーをよそに彼女は暗く、落ち込んだ気持ちでいた。管理人はその意味がよくわかつたので、軽く2、3回シルフイーの肩をたたき、一緒にため息をついてやつた。シルフイーは管理人の方を向き

「ありがとう」

といつた。

そのころ街ではヘルゼーが居なくなるということで大騒ぎだつた。この街を出ることが嬉しくてたまらないヘルゼーが子供たちにいいふらして廻つたからだ。大人達はみなあまり大きな反応はしなかつた。街から一人孤児が居なくなるということを皆、さみしくて言葉がでなかつたのだろう。そして昼の12時ジャスト、広場から2人は15年暮らしたこの街を出ていった。

第2話 黒衣に身をまといつ少女（後書き）

第3話は早めに更新するように努力します。感想など頂けるととても嬉しいです。よろしくお願いします！

第3話 「玉」の使い手

街をでたのはたった15分前。そしてヘルゼーはきづかされた。自分が井のなかの蛙だつたということに。普通に物語や絵本の中に入りだと思い込んでいたいわゆる、魔物とかモンスターと言わるものが目の前にいた。

「ウソオ…」

「あれ、こんなことも知らなかつた?」

かなりあつけにとられているヘルゼーに対して落ち着き払つたシルフィーが声をかけた。

「ええ?! 知つてたの?」

「当然。」

冷静に切り返されたのでよけいに驚いた。

「こーんな低級モンスターでビビッちやダメよ。何のために玉を採取したと思つてんの?」

「えつ?! あれつて闘技大会とかお遊戯会で使うだけじゃ…」

「想像力、もしかして0?」

「なつ…!」

「剣、さつきみたいに出してみなよ。」

「どーやって出したつけ。えーっと。」

「ふーーー。」

やれやれという感じでシルフィーがため息をついた。

「んじや最初の方は私が敵を倒すから見て覚えてね。言つとくけど街の外じゃこれくらい日常茶飯事になるから。」

ヘルゼーはまたもや、あつけにとられた。ヘルゼーは若いがいつも重労働を強いられていたので力にはそれなりに自身はあつたが、体の甲殻がいかにも岩盤のようなモンスターを剣で叩き切れる自信はこれっぽっちもなかった。それよりもヘルゼーよりも腕の細いシル

フイーが恐れもせずにモンスターに立ち向かっていることに驚きを隠せなかつた。次の瞬間、シルフイーが叫んだ。

「言つとくけど、回避とか防御ぐらいは自分でしてよね！」

「マジ？！まあそーだよね…とかなんとか思いながらもヘルゼーは玉を無意識に握つていた。彼女も玉を取り出し、何かを念じるよう額に一度あてた。すると、スウッと消えて木でできた中央に玉の入つた杖がでてきた。とつさにヘルゼーは叫んだ。

「そんな杖じや倒せないつて！」

「そんなん心配したら

「あんた、バカ？殴つたり、斬つたりするだけが戦いじゃないでしょ。」

と普通ーに言われた。すると彼女は杖を高く上げ光りの弾を何発か魔物にぶちあてた。魔物消滅までの時間約2秒。あっけない。つかすぐえ。

「キミキミ。」

シルフイーが後ろを振り向き、ヘルゼーに言つた。

「出来てんじやん。心がそのまま表れてる。」

え。まだ。無意識のうちに僕は玉を変化させていた。今度はすつごいじつつい盾を出していた。怯える心がそのままでたみたいで何だか嫌だつた。でもシルフイーからでた言葉は意外なものだつた。

「盾は盾でも身軽な木製の盾がでてこなくてよかつた。ビビつても戦いから逃げるといふことはあまりしたくないみたいね。」

深層心理を読まれた気がした。そしてシルフイーは言いだした。

「私たちまだお互いの事をよく知らないわね。よしつ！！！」

「へ？」

「歩きながら話すわよー。」

「はあ、」

「カトレア・シルフイー（実名）職業：討悪師、年齢16歳。魔力：測定不能…

「ちつ…ちょっとまつたあー！！」

「何？」

「何今は何今？」

「はあ？」

「魔力・測定不能つて！！」

「ええ。文字どりよ。」

「何で測定不能なの？！」

「計測器が壊れるのよ。私が使つと。」

「は……？？？」

ヘルゼーは言葉を失つた。計器類は最大5000まで測定出来るようになつてゐる。普通3000と言つたらす「い魔力だと言われる。（ちなみにヘルゼーは1500。いたつてフツー。）それが計測不能だとオオオオ？信じられるかあ！？そんなヘルゼーをよそにシルフィーは話をすすめる。

「父：カトリア・クロック、48歳。故人。髪、灰色。職業・玉を使つた武器屋。剣道5段。怒ると目の色がかわる。普段の目は青。（怒ると紫）戦争に巻き込まれて死亡。頭はいつも爆発したような寝癖があつた。」

「死んじやつたんだ…。」

「うん。それからつと、母・カトリア・フロスキー。48歳。故人。職業：魔術家（占い師のようなもの）魔法検定8段。（最高10段）目の色：紫、髪：黒。戦争時前線に召集され、そのまま戦死。まあ、私もあなたと同じ孤児よ。つと、家族のことはこのぐらいにしておいて、ヘルゼー君、キミのことをおしえてね。」

「えつと…」

「ああ、話せなくていいわ。」

「は？」

そういうとシルフィーは玉を取出した。

「まさか…」

「そのままかよ。玉の性質の一つ見透かす力。アドベア・ヘルゼー、

15歳。あら、1口下ね。父：アドベア・カイト、30歳。故人。職業：ジャーナリスト。戦争に巻き込まれて死亡。母：アドベア・クリス。29歳。故人。まだ若かったのに。職業：ん？見えない。知られたくないのね。目の色、青。髪、秘密の多い母親ね。」

シルフィーが一通り見ている間ヘルゼーはあ然とし、言葉一つでなかつた。

「何でそんなことまでつて顔してるわね。」

えーーーー。何で僕が考へてることまでわかるのさあ。反則だよー。とか思つてたらシルフィーが教えてくれた。

「反則も何もないわ。さつき玉を採取したときに言つたじやない。『能力を写し取れるもの』つて。あの玉には相手を見透かす能力も秘められていてね、修業した人が使えば個人情報なんてカンタンに引き出せちゃうって事ね。」

すっかりバレてるし。この人に隠し事やウソは無駄だなあとヘルゼーは実感した。すると突然ヘルゼーはめまいを感じ、その場に座り込んでしまつた。

「あ……れ？？立てな……。」

「当然ね。訓練も受けてないシロウトが玉の変形を1日に22回もするなんて、死にたがつているようにしか見えないもの。どこで身につけたのか知らないけど、ちゃんと修業しないと、その内本当に死ぬよ？外の世界はキミがいた『夜も安全に眠れる町』とはちがうんだから。」

なんかバカにされた気分だ。果てしなくムカついた。

「大丈夫。今はできなくてもいざれ出来るようになる。確實にね。心配しなくて平気よ。私も修行中の身だし。あなたの修業に付き合えば私も修業になるしね。」

それじゃ、僕は修業の毎口だなとヘルゼーは思つた。ど～みても、スバルタ教育をしそうな顔をしている。特に最後の笑顔がね……、何とも言えない気分でヘルゼーは聞いていた。すると彼女が突然いつた。

「さて、そろそろ寝床の準備をしなきや。」

「え？！まだ昼だよ？！」

「バカね、立てなくなるまで魔法使つたら旅はストップ。今日はここまで。それ以上無理矢理歩いて死にたいんなら別だけど。」

「野宿？」

「当然。」

「女の子なのに？」

「仕方ないでしょ？旅してるんだから。」

「襲われたら……」

「襲う気なの？」

「僕じゃなくて！！！」

ヘルゼーは顔を真っ赤にしていた。それをよそにシルフィーは笑っていた。くすくすと。

「何が可笑しいの！……！」

ヘルゼーが怒ると

「ごめんごめん。大丈夫よ。あなたに襲われるとは思つてないし。魔物でしじう？平氣よ。私の魔力をなめないで！」

そういうと、彼女は玉を手にし、大きな大きな、そつまさに死神が持つてゐるんじやないかと言うような鎌を出してみせた。

「すご……！でもでも、寝てるときに玉持つてなくて魔物とかに襲われたら？」

「とんだ心配性ね。みてて。」

そういうと、彼女は玉を持たずに立ち上がり何も無い手から光の弾を何発か打放つた。

「ええ？！」

ヘルゼーが驚いているとシルフィーが教えてくれた。

「だいぶ魔力は持つていがれるけど玉がなくても戦えるの。だから平気！」

ヘルゼーは思った。味方でよかつた。敵だったら相手にしたくないランキング、ぶつちぎりでNO・1だ。そしてその日はそこで泊まつた。ヘルゼーは座り込んでから、1歩も動けなかつた。体が悲鳴をあげているのが一発でわかつた。

「くつ……」
そんなヘルゼーなんて全く気にせずにシルフィーは着々と夕飯の準備をしていた。……といつても皿を並べているだけなのが。

「ねえ。」

「うん？」

「何か作んなの？」

「作るよ？」

「どーやって？」

「こーやって……！」

「ポムっ！ 軽快な爆発音が目の前でして、もくもくと煙につつまれた。もしかしてまた魔物？！ 一瞬の不安とともにヘルゼーは叫んだ。

「シルフィー？！ シルフィー？！ 大丈夫かあ？！」

するとトンでもない返事が返ってきた。

「何が？」

えーーーーー。本日2度目の超ビックリ発言。心配して揃したかもしが……した！ 目の前の煙が晴れて二コ二コ顔のシルフィーが現われた。同時に、すんごい料理。超豪華フルコースと言つた感じだ。

「こつ……コレつて。」

「魔法よ。ちやちやつとね。今日は旅の初日だからちょっと豪華ね。」
いつのまにか夕暮れ時。辺りは暗くなり始めていた。

「電気つけなきやだね。」

「何言つてんのヘルゼー。」

「え？」

「ここは森よ？ 電気なんてないわ。」

「」

あ、そつか。水も電気もないんだ。

「夜とかど～すんの？」

「コレ。」

と言ひながらシルフィーはランプを取出した。中には小さな玉が入つてゐる。

「よつ。」

人差し指で玉を指すと玉が炎のようにゆらめき、輝きだした。でも、どうみても小さい。手のひらサイズだ。

「それと…ホイツ」

ランプを指さすと、ランプが大きく大きく大…つてでかすぎだらコレー？！

「ちよちよつ…！」

「ん？」

「『ん？』じゃなくて…『カイ！…』」

「ああ、キャンプファイヤーみたいに暖まるにはこれぐら大きくな
いとね。」

本当にキャンプファイヤーするときのくんである木みたいな大きさ
だ。

「そつか、暖もとらなきやなんだ。」

「そーゆーこと…」

「あつたけ～！」

「今は動けないだらうからもう少ししゃに居てね。」

「どここくの？」

「お風呂。」

「はあ？…」森のなかだよ？…」

「鈍いなあ……。」

「あー！玉ね。」

「そーゆーこと、ちなみに、のぞいたら地獄が見えるから。（こつ
こりと妖笑）」

「のぞかないよつ…つか動けないし…！」

「そりだつたね。」

なんて今知つたみたいな言い方しやがつて…。たまにシルフィーつてイラつとくるな…。

「冗談なんだからそんなに怒んないでよ?」
なんて言いやがつた。

「つてかキャラ変わりすぎ!」

誰がキャラ変わるほど怒らせたと思つてんだ――――――――心の底からさげびたかつた。そんなことを思つていたらいつのまにかシリフイーは居なくなつていて少し離れたところで入浴しているみたいだつた。ヘルゼーはフルコースを目の前にして、限界だつた。ヘルゼーは少しだけ体が動いたので1番近くにあつたフルーツにかぶりついた。

「うんめえ――――――！」

でもこれ以上は動けないのであとのご馳走はシリフイーが来るのを待つしかなさそつた。手に取れるだけのフルーツを取つて、元の位置に戻りフルーツを堪能したが、5分でなくなつた。

「腹減つたなあ。」

情けない声で呟いていると何処からともなくでつかいピコピコハンマーで殴られた。ピコッという良い音がした。以外と痛かつた。

「いつてつ――！」

「先に手をつけた罰ね。」

バレたか……。シリフイーは新しい洋服になつていた。

「パジヤマ?」

「そーだよ?」

「どーりで。」

「何が?」

「色。」

「は?！」

「普段は黒じやん?」

「ああ、白だから?」

「そーゆーこと。」

シルフィーはラフな格好だつたが白の洋服に黒の髪がよく映えていた。

「いつのまにか口癖うつつてるし。」

「あ……。」

「まいつか、んじゃ夕食にしよう。」

「待つてました！」

「いただきます！」

「いただいだいます！」

「何ソレ～！」

シルフィーはツボに入つたらしく大笑いしていた。

「だつて、先に食べちゃつてたから……。」

「はははっ！そーだね。間違つてないよ君。」

なんてたわいもない話をしながらの久しぶりに楽しい夕食になつた。だが1つおかしい事といえば、ヘルゼーの異常な食欲だつた。1人で5人前は食べている。

「普段こんなに食べたことないよ。こんなにお腹すいたこともないし。」

「魔法は恐ろしく体力を使うからね、たくさん食べないと持たないよ？」

「うん。実感したよ。」

夕食をすませるとヘルゼーは少し動けるようになつていた。

「おつ。立てる！！」

「無理しちゃダメだよ。そのまま行つてお風呂入つておいでよ。服も用意しておいたから。気に入らなかつたら魔法で好きなのに替えてあげるから安心して。」

「あつありがとね～。」

つてドラム缶かいつ！なんてベタな。まあ仕方ないか…。でも、これにシルフィーも使つたんだよね…、ちょっと気まずい。まついつか…熱すぎるかと思つたら以外に適温。あつたけーーー。何か

色々あつて今日は疲れたな、早くあがつて寝ちゃおつ。

ザバツと音をたててあがつた割りにはシルフィーは気付いてなかつた。シルフィーは地図用の玉を眺めていた。その玉には、世界地図が映し出されていたがいくつか、赤い矢印が点滅していた。もっとよくみてみたいと思い、シルフィーに気付かれないようにそつと近づいたがヘルゼーが見える位置になる前にシルフィーが気付き声をかけられてしまった。

「ヘルゼー、出たんなら早く言つてよーー！ あなたは今一刻も早く体を休めなきゃならない時なんだから。」

「あつごめん……。」

「謝る所じやないけど、まあいいや。ああ。」

そつと、シルフィーお得意の魔法でカンタンにベットが出てきた。

「おやすみ。」

「おやすみ……。」

シルフィーは少しうわの空だったが特に気にしなかった。なにより疲れて眠すぎた。目を閉じた瞬間、意識が吹っ飛んだ。

第4話 危険な日食に襲われる村 前編（前書き）

更新が遅くなってしまい申し訳ありませんでした！毎回読んでくださっている方々、本当にすみません！それから嬉しい事に読者数が100人を突破いたしました！本当なら突破記念もしたいし、毎日更新したいのですが何分作者に時間が無いのでお許しください！出来る限り書いていこうと思いますのでこれからもよろしくお願ひします。

第4話 危険な日食に襲われる村 前編

朝、目覚めるとシルフİYEーはもう起きていた。体は充分動くし、気分爽快とはまさにこのことをこののだからと喜びながらさつきりとした目覚めだ。

「ん〜〜〜〜！」

軽く伸びるとシルフİYEーが気付いた。

「おはようヘルゼー。よくねれた？」

「うん！バツチリだよ〜。」

「それはよかつた。んじゃ！今日からの旅は修業しながらの長〜〜い旅になるわね！フフフフ」

最後の笑いはやめてくれ。本気で恐いから。昨日あれだけの魔法の数々と魔力を見せ付けられたら誰でもこうなるだろう、と言つぐらいい本当にすごかつた。あんな魔法ショーを間近でみたのは初めてだつた。でも気合いは充分。

「よろしくお願ひしや〜す。」

「お〜！やる気あんじやん！」

「とりあえず生きしていくにはコレしかナイだろ？」

「そーゆーこと。」

つー訳で歩き始めたんだけど、修業つて何すんだろ。昨日の1日でシルフİYEーが見かけほどか弱くないって言つことと、多少恐いつていうか、100%逆らえなって言つことと、スバルタ教育だなつて言つことだけはよく分かつた。

「ふ〜ん、私のことそ〜ゆ〜ことだけ分かつたんだ〜。」

「しつしまつた！玉の存在を忘れてた！！

「話しつけてんのにな〜んも反応しないから、何考えてんのかと思え巴そ〜ゆ〜コトなんだ。じゃあ、お望み通りスバルタ教育で修業を開始させていただきますね！」

「はつは〜〜い。」

人生最大の過失だ……。ヘルゼーはそう悟った。

「玉を持つて」

- はい

一 紹介 あ形狀變化！」

は？

「は？」いやなくて、昨日みたいに。剣とか盾とかなんでもいいから。まず第一の修業は玉の形状変化に耐えられるくらいの魔力と体力をつくること。はー！始め！！

卷之二十一

「始め！」とて言わねたてどニヤニだかなんて覚えてた……」「昨日の私の助言、まさかとは思うけど忘れたとか言わないよね？」

忘れました
なんてし

卷之三

「……と確か

卷之三

卷之三

卷之三

「三郎君、ジヨウは長刀太『二十一』のハリハニ

卷之三

剣をイメージして創る。すると、ぐ[ニ]や。すつごい変な感じだけど玉に力を吸われ、玉が剣に変化した。

「上田さん、じやあなんでもいいから、

何個だせるかとか、期限をきめてできるだけ多くだせるみたいにチャレンジすること。

「イエツサ。」

ヘルゼーは次か

ハンマー 銃。6品目でヘルゼーが限界を訴えた。

卷之三

「甘い。」
するとシルフィーは冷たく言い放つた。

鬼だ。鬼がここにいるよ――――――。

「まあ、ショーガないか。白い髪でここまでできれば充分ね。」

「ふう。」

胸を撫で下ろした次の瞬間だった。

「10分たつたら行くから。」

え――、昨日は泊まつてくれたのに――。つて言ひような顔をしていたら、

「いつまでも止まつてられないでしょ。旅の途中なんだから。それに、一度泊まつた周辺に長居するのはよくないわ、魔物に襲われる確率も高くなるしね。」

「あ、そつか……。」

「わかれよろしい。さつ行くわよ。」

「もう……？？」

「只今10分1・2・3……」

「あ～もうわかつたよ！行くよ――」

ヘルゼーは半分自棄になりながら答えた。それからは歩きながら魔力を回復して、できそうになつたら1品だしてみると言つた具合で進んでいった。そしてヘルゼーが15品目をだしたときだった。急に緑のトンネルが開けて明るくなつた。

「着いたわ。清らかな水で名高いシラティスの村よ。」

「もう着いたの？！」

「休んでから2時間以上は歩いていたわ。着いて当然よ。」

そんなに経つっていたのか。ヘルゼーは全く気付かなかつた。つていふか、僕達がいた街よりもはるかに……規模小つさ――入つたと思つたらもう村の出口が見えてるし……。

「小さいとか、言つちゃダメよ。私たちのいた街が大きすぎたんだから。」

「ここもカトアニア共和国の中の村なの？」

「そうよ、まだ国もでないわ。隣村に来ただけだもの。」

「国つて地図でみると小っちゃいけど実際は広いんだね～。」

ヘルゼーが改めて実感したように言つてシルフィーは呆れた眼差しを向けて言い放つた。

「あんた、本当に何にも知らないのね。それでよく今まで恥をかかなかつたこと。」

ひどい毒舌だ。人生丸ごと馬鹿にされた気分だ。するとシルフィーは村に異変が起きていることに気が付いた。

「！待つて！」

ヘルゼーが足を踏み入れる1歩前だつた。

「何？」

「この村、様子が変だわ。」

「はあ……？別にどこも変わつてなんかいないと思つけど……。」

「急によ、昼なのに暗くなり始めてる……。」

ヘルゼーが辺りを見回すと、今来たばかりの森は明るく、村の出口も明るい。ただ目の前にある村だけが夜のように暗い。ヘルゼーが空を見上げた。するとヘルゼーの瞳に信じられない光景が目に映つた。闇だ。一面の悪雲が空を覆つている。

「シルフィー……アレだよ！」

ヘルゼーは悪雲を指差し叫んだ。シルフィーも空をみた。そしてシリルフィーからは思つてもみない言葉が飛び出た。

「あーー！日つ……食？何故？！今年は起きないはず……！」

「えつ！シルフィー！見えないの？！」

「何が？日食なら見えてるわよ？」

おかしいなと思つてもう一度空を見上げると、もうそこに悪雲は無く、シリルフィーの言うように闇に喰われている太陽が目に入った。

「あ……れ？」

「どうしたの？ヘルゼー。」

見間違ひだつたのかなあ……、魔力をつかいすぎて幻覚をみて錯覚したのかも知れないと思い、誤魔化した。

「なんでもないよ。ただ魔力をつかいすぎたみたい。」

「まあ、村についたし、今日は休めるだろうから。とりあえず事情

を聞かなきや。」

「日食か。旅の方、日食がめずらしいですか？」

シルフィーが話した瞬間に声をかけられたので驚いた。後ろを振り向くと、畠仕事を終えたばかりのような鍬を持った中年のおじさんが立っていた。そして、すぐさまシルフィーが対応する。

「ええ、実際に見るのは初めてですし。」

するとそのおじさんはとんでもないことを言いだした。

「この村ではかれこれ、300年ほど前からほぼ毎日のように日食が起きています。今となつてはもう日常の風景の一部です。」シルフィーが柄にもなく焦つているのがわかつた。

「一番この現象について、詳しいのはあなたですか？」

旅の基本、最初に話した人から情報を聞き出す。

「はい。村長ですか。」

自慢かよつーとツツ「ヨミを入れたくなるがガマンガマン…」。

「ではお話をしましょ、討悪師様。」

「……はい。お願いします。」

あれ？討悪師つて確かに知らない人のほうが多いつてシルフィーが言つてなかつたつけ？

「村人で老人に近いおじさんよ？古い習慣の強い所ほど知つてゐる人は多いわ。」

小声でシルフィーが教えてくれた。おじさんに聞かれていたら大変だもんな。

そして、村長の家に案内された。

「どうぞ。何もありませんが…。」

「ありがとうございます。」

席に着いた途端、シルフィーが切り出した。

「单刀直入に聞かしていただきます。こんなに頻繁に日食が起きているのは何故ですか？それに日食が起きているのに何故平気で外を歩けるのですか？日食が異常な回数起きているということは、闇に

村が喰われている証拠だというのに……。」

「あれ？！口食つて自然現象じゃないの？」

「普通に起きている分には全く問題無いわ。でもこの村のように通常ではありえない回数の口食が起きている場合は、闇に呑まれている証拠なのよ。誰の心にも悪魔がいるのは知っているでしょ？」

「うん。」

すると村長が話し始めた。

「光の玉です。光の玉を身につけていれば心が闇に汚されず、魔物になる心配もない。」

「え？魔物つて元人間なの？！」

「呆れた。本当に何も知らないのね。まあ学んでいなければ仕方ないか。その通り、魔物は元人間よ。今度詳しく教えてあげるから今は黙つて。人の命にかかるかもしれない話だから。」

そんな重大な話になるのか……、つていっても誰の命だろう。多分村人だよな……。会話的に。シルフィーが村にきてから焦つてている理由もそのせいだろう。

「でも、よく発見されましたね……。光の玉なんて。解決策なんてなかなか見つかるようなものじゃないのに……。」

「村の伝説のようなものですが、今から280年前に、そう口食に襲われるようになったころの話です。村を捨てて逃げるか、『使命』をまつとうするために残るかで村人意見は真つ二つに割れました。日食のせいで皆の心は揺れに揺れ、苦悩していたその時でした。一人の討悪師様が現われたのです。名をカトリア・ハウゼット。闇の呪いの強いこの村を浄化し、一時的ではありましたが光の保護魔法をかけてこの村を去つたそうです。」

「使命……。何のことだかさっぱりわからなかつた。」

「ところが、最近困つたことが起きているのです討悪師様。」

「なんですか？光の玉を持つていてるなら、闇の心配はいらないはずですよね？」

「ええ、1人を除いては。」

「どういう意味ですか？」

「村に1人だけ不幸にも日食の時に産まれた娘がいまして。その娘だけが呪いが強く、光の玉を持っていても日食の時は外にはだせません。」

「どんな子なのでですか？」

「とても元気で明るく優しい子です。会ってみますか?」

「はい。お願いします。」

「わかりました。では、参りましょう。」

村長の家をでて、真っすぐ前に50歩ほど進んで、着いた。おむかいなら紛らわしいことしないでよ！表札がでていた。木製のため少し読みづらいが、

ミケ・ガステス

ウス
ライティニア

と書かれていた。家は留守だったので畠にいくと三ヶ田と思われる人物が働いていた。

だあよ〜〜！」

村長元氣だな

「わかりました！」今そちらにうかがいます！」

ミケ氏の方が若いはずなのに声が小さく聞こえる。コレが村長パワーか。そんな馬鹿なことを考えながらミケ夫婦がくるのを

「お待たせいたしました。私が三カ・ガステスです。」お嬢の

セウスです。

「よろしくお願ひします。娘を助けてやつてください!」

「 まずお伺いさせていただきますが娘さんが日食の被害者なのです

ね？」

卷之三

「娘をどうにかしてやれませんか？元気なのに、1日の半分は外に

でれないなんて。まだ13なのに。」

奥さんが話した。

「遊びたい盛りで最近はよく家を抜け出すよつになつてしまい困つてゐんです。あの子が口食の時に家を抜け出したりでもしたらと思つと……。」

ミケ氏の発言にシルフィーが食い付いた。

「それは危険ですね。ところで娘さんは闇が深くなると何に化けるのですか？」

ケルベロス

「闇の化身とでも言いましょうか……。三面犬ですよ。」

すると奥さんが付け足すよつに言つた。

「黒豹になるときもあります。」

するとシルフィーは驚いたらしく口を見開いて言つた。

「固定していないのですか？」

「いいえ。よくわからないのです。最初は口食も気にせずに外に出していたんです。呪いを知らなかつた頃は、光の玉を持たせれば大丈夫だと聞いていたので。そうしたらずつと三面犬のミニ版になつていたのです。私たちは畠仕事で目を離していて気付いた頃には私たちを獲物のように狙う目でした。それからは外出禁止にして。でも運悪く抜け出したのが口食の口に一度当たつてしまつて。その時が黒豹だつたのです。」

少し間をあけてからシルフィーが言つた。

「もしかしたら、成長と供に変化があきたかもしぬませんね。娘さんは？」

「もちろん家の中に……。」

話していた奥さんの顔色が急に変わつた。

「な……ん……で……? ? ? !」

そういうつて奥さんは氣を失つた。嫌な予感は的中するもの。三面犬になつた娘が後ろにいた。

「三面犬だつたか……、お願ひです。できるだけダメージは少なく

……」

父親が叫んだ。

「わかつています！ですが多少はガマンを……。」

「妻を家に入れてきます！」

「お願いします！」

「シルフィィービーするの？光の弾じゃ強すぎるよ？！」

「分かつてゐるわよ……だつたらこうするまでよ！……」

そうするとシルフィーはまた杖をだし、天高くあげた。光の弾とおもつたら杖についている玉からものすごく眩しい光があふれ出了た。

「うわ……まぶし……。」

まばゆく光つたあとはスウッとうすれた。

「眩しいだけで聞くの？」

目をチカチカさせながらヘルゼーが言った。

「この種の魔物は氣を失う事が多いわ。そーすると……。」

やつとのことで目を開けたヘルゼーが見たものは三面犬ではなく美しい村娘が一人倒れていた。

第4話 危険な日食に襲われる村 前編（後書き）

意見・感想・批評、いただければ幸いです。作者の成長の為なので
厳しい意見もありがたいです！よろしくお願ひします。

大橋結菜

第5話 危険な日食に襲われる村 後編（前書き）

ついに、日食村編の完結です！いや～ここまでくるのに思った以上に時間がかかってしまい申し訳ありませんでした！！読んでくださいている方、（読んでくださると良いな……）こんな作者ですがこれからもよろしくおねがいします！

第5話 危険な日食に襲われる村 後編

シルフイーは頼みごとでもなんでも突然言つてくる。今回も例外ではない。

「ヘルゼー、体力には自身あつたわよね？」

「え……？」

「分かつてゐるわね？」

「はい……わがつでますども……。」

ヘルゼーはしぶしぶ娘を家のなかに運んだ。娘が予想以上に軽かつたのがせめてもの救いだった。ミケ氏と一緒にベットに寝かせて家にあがつた。

「娘は？！」

心配で心配でどうしようもないようだつた。

「大丈夫。落ち着いてください。氣を失つてはいるだけです。が、このままではいけませんね。生身の人間が体を変形させるといふことは体への負担が半端じゃないですから。それに意志に反しての闇の化身への変身ですから、より魔物に近くなつてしましますし……。」

「どうにかなりませんか？討悪師様。」

シルフイーは少し考えてから言葉を紡いだ。

それにシルフイーには気掛かりなことがいくつかあつたので思い切つて聞いてみるとこにした。

「あの……、一つお聞きしたいことがあるのですがよろしいでしょうか？」

「もちろんですとも。なんなりとお申し付けください。」

「村の方はみんな討悪師の存在を知つてはいるのですか？それと、なぜこんな危険な日食に襲われてまでこの村におられるのですか？」

「村長から聞かれたと思いますが使命をはたそうという意欲のあるものだけが残りました。その使命とは討悪師様が危険な旅をしてまで追い求める、村の秘宝。『聖玉』を守るためです。その事を当時

の村長が村人に話したので討悪師の存在も、『聖玉』の存在も知っているのです。」

シルフィーはうつすらと目に涙を浮かべていた。

「すべて承知のうえで、私達……旅する討悪師の為に……闇に沈むかもしれない茨の道を選んだというのですか？！」

シルフィーの目から大粒の涙があふれ頬を伝つて床に落ちた。美しい涙だった。悲しみではなく、感謝の涙だった。

「そうです。すべては討悪師様の為、世界の為。討悪師様がこの逆境の中つらい旅をしてくるのに私達だけあきらめて逃げるわけにはいかなかつた。」

シルフィーは心から感謝の意を表し、深々と礼をした。

「必ず、娘さんは何が何でも治してみせます。村の方々の決意、無駄にしないためにも。もし、儀式で浄化しきれなければ旅に同行してもらうことになるかも知れませんがよろしいでしょうか？」

「そんなに強力な呪いなんですか？この村での儀式だけでは治らないのですか？」

「満月の夜。つまり今夜試しては見ますが何とも言えません。」

「そう……ですか……。」

「まあ、まずは今夜です。ですからあまり気をおとさずに……。」

「はい、わかりました。妻の様子を見て参りますので失礼します。」

「はい。」

シルフィーは軽く会釈した。

そしてヘルゼーの頭に1つの疑問が浮かんだ。

儀式つて何？

僕つて本当に無知だ……。実感しながら恐る恐るシルフィーに聞いた。すると……あ～やっぱり……。

「浄化の儀式も知らないの？それでよくついてこよつだなんて思つたわね。浄化の儀式つていうのは、満月の夜に討悪師が湖の上とか、泉とか、神聖な場所で行なう儀式の事よ。あなたも知ってる様に討

悪師には邪を払う事が出来るでしょう？だからその儀式で彼女の邪を払つてみるのよ。」

「ふうん。でも湖の上とか、泉の上とかって立てるのかな？水の上だけど……、まあシルフィーの事だから魔法でチャチャッと出来ちゃうんだろうな……。羨ましい限りだ。

「まあ普通は多少の邪氣なら夜じゃなくて昼でも神聖な場所じゃなくとも出来るんだけどね。闇の使者になるくらいだから相当闇が濃いと思うの。だから、略式じゃなくて正式な方法でやつてみるけど。それでも例外的にダメな時があるのよね。その時はすべてを浄化する旅の最後に完全浄化っていう形になるかもね。」

なる程なる程。旅の目的ぐらいいヘルゼーだつて知つてる。でもなんで最後なんだろ？ヘルゼーの中にたくさんの疑問が浮かんできたが、聞くのはやめた。否、出来なかつた。シルフィーはすでに精神統一の為に一人になるといつてどこかへ行つてしまつたため聞けなくなつた。とりあえずヘルゼーは森に入つてすぐにある、切り株に腰掛け、休み休みだが玉の変形の修業を続けていた。

一方、シルフィーは湖を眺めながらヘルゼーの事を考えていた。
この世界では色が濃い程魔力をためやすい。

髪でも瞳でも。

明らかにヘルゼーは矛盾している。

髪が白で瞳は青？何か変だ。

髪は一番魔力をためにくい体質を表す白い色をしているのに瞳は青なんて。

青は紫の次に魔力をためやすい色なのだ。

誰がどう見ても矛盾している。

それに母親のことも。

玉で見て母親の情報が見えないなんて経験は初めてだ。ヘルゼーの手前、よくある事のように振る舞つたが実はめずらしいケースなの

だ。玉で見えない情報、体に矛盾点。なにがある。シルフィーはヘルゼーにたいして興味がわいた。こんなに色々特殊な人間を相手にするのは初めてだ。精神統一のはずが色々気になりだして、全く集中出来なかつた。

そして時は流れ、夜。満月が綺麗に輝いていて、まるで漆黒の闇の海を照らす、灯台のようだつた。シルフィーはミケ氏とその娘ライティアを連れて湖のほとりにいた。ヘルゼーも修業を中断し、立ち合つた。シルフィーが最初に湖の上に立ち、ライティアを手刀で気絶させた。が、ライティアは倒れる事無く、静かに湖の上で横になつたかと思いきや、フワフワと軽く50センチぐらい浮いていた。

「すっぴえ……。

あんたも浮いてみる? とか言われそうちから小さく咳いて終わりにした。でもそんな「ト言つてる時じやないなつていうのが明らかに伝わつてきた。シルフィーの様子が変だ。柄にもなく緊張しているようだつたし、とにかく普通じやなかつた。何が始まるんだろう? …。するとシルフィーは湖の上に立ち、村人に深々と礼をし、玉を杖に変えた。そして、自分の涙を玉に一滴たらした。すると、シルフィーが水の大きな球体に包まれた。呼吸は大丈夫なのか心配だが、シルフィーはにっこりと微笑んでいるので大丈夫だろう。

途中村人の話を盗み聞きしたが、どうやら例の『聖玉』とやらに自分の実力を認めさせるとかなんとか。儀式自体よく飲み込めていいヘルゼーにはさつぱり何が何だか分からなかつた。

と、考え事をしているうちに儀式は進んだらしい。

第2段階へ移行したようだ。

湖の上で水に包まれて立つていて(浮かんでいた?) シルフィーが、そのまま湖の中に入つていつた。

儀式の途中なのにいいのか? そう思つたとたんシルフィーがあがつてきた。村人達はびっくりして、みんな息を呑んでいた。シルフィ

ーの手には綺麗に水色に輝く大きめの玉があった。あれが……聖玉?なんか、シルフィーが聖玉を持って来て以来、空気が変わった気がした。なんかビリビリする感じた。しかもなんとなくひんやりとした感じの空氣。

そして儀式は最終段階になつたようだ。シルフィーが聖玉を持ちライティアのそばに立つた。そして持つていた杖の中に埋め込まれていた玉と聖玉を交換し、昼間ライティアにやつた様に光を出した。だが昼間とは違っただ眩しいだけじゃなく青く清らかなとてもとても綺麗な光だつた。ライティアの体から邪が抜けていくのが見えた。黒いモヤが見えた。

幻想的な光景だった

そしてシルフィーはミケ氏と村長に二言三言会話を交わし、そのまま地面に崩れ落ちるように倒れた。魔力を使いすぎたのかなあ?でも計測器でも計りきれないシルフィーの魔力を使い果たすような魔法があるのだろうか?

とりあえず詮索は後にして、ヘルゼーはシルフィーを引き取り、(抱えて)ミケ氏の部屋を貸してもらい寝かせた。シルフィーが回復するまで旅は中断ということになるだろう。もつ、夜も更けていたのでヘルゼーも眠ることにした。

翌朝

ヘルゼーが目覚めるとシルフィーはまだ眠っていた。やはり魔力回復には時間が掛かるらしい。そつとしておいた方がいいと思い、ミケ氏にシルフィーを頼み昨日の湖へ向かつた。

湖はいたつて普通。

ときどき吹く風に、水面を揺らすことはあるけれど得に変わった点はない。じゃあ昨日シルフィーが湖の中に入れたんだから、と思い潜つてみた。しかし何回潜つても途中までいくと壁のようなにかに阻まれて進むことが出来なかつた。シルフィーは湖底に何を見たのか確かめたかつたが、引き上げるより他になかつた。

しかたなく、他にやることもないの、シルフィーの様子を見に一度戻ることにした。すると大声で僕の名前を呼び続いている人が居る。あんま呼ばれると恥ずかしいんだけどな…………。ってミケさんじやん！なんかあつたのか？ヘルゼーはミケ氏のもとに駆け寄つた。

「何がありました？！」

「おお、ヘルゼー君。やつときたか。シルフィーさんとうちのライティアの意識が戻つたぞ！！」

「本当ですか？！」

「ああ！会つてくるといい！」

「ありがとうござります！」

ヘルゼーはミケ氏の家に入り階段を駆け上がつた。扉を開けると、起き上がつておかゆを食べているシルフィーがいた。

「シルフィー！」

「ああ、おはようヘルゼー。」「もう大丈夫なの？」

「ええ。魔力を使いすぎただけだから。心配した？」

するとヘルゼーは絶対悪いことを思いついたと分かる不適な笑みを浮かべた。それはもう背筋が凍るぐらいの。

「なつ！何よ！その顔は！何が目的？！」

「フフフ……シルフィーには心配かけさせた責任を取つて頂きます！」

「何しろつていうのよ？！」

シルフィーが不安そうな顔をする。

「大丈夫大丈夫！そんなたいしたことじゃないから！」「なによう

……。」

「魔法＆聖玉＆儀式のこと詳しく教えて！」

「つまり、魔法関係の講義をしろと？」

「流石…よくわかってるう…！」

「はあ…私はなんて弟子を取つてしまつたんだろう…。」

「ねえねえ、いいよね？シルフィー？」

まるでわんぱく5歳児の子供のような顔つきで迫つてくるヘルゼーにとうとうシルフィーは折れた。

「わかつたわよ。しようがないなあ。ただし、旅しながらだし、その間修業もちゃんとするんだからね？」

「わかつてるよ！ありがとシルフィー！」

全くこいつのこの笑顔にはかなわないなとシルフィーは悟つた。

「話し変わるけど、もう少し回復してライティアの様子を見たら旅を再開するわよ。いつまでもここに居てもしようがないし。」

そう言うとシルフィーは下へ降りていった。もう平氣そうな顔をしている。空元氣じやなればいいんだけど大丈夫なのかなあ？

意識が戻つてからの行動が早い。ヘルゼーも続いて下に降りた。

「おはようライティア。具合はどう？」

「すこぶる快調よ。あなたから預いた手刀の衝撃さえなれば全快といったところかしら？」

初めて声を聞いたが容姿と同様に美しい声だった。まさに鳥のように少し高めの声だ。

「まあいいわ。ヘルゼー君、シルフィー、あたしにかかっていた呪いはどうなつたの？」

「ちよつとまつてね？今聖玉で調べてみるから。」

「また眩しく光らす氣？」

「まさか…とうしてみるだけよ。」

「それならいいんだけどね！」

「えつと…。闇の比率は大分減少したわね。この調子なら日食が起きていても光の玉さえ持つてれば大丈夫！」

「本当?! 嘘じゃなくて?! 本当の本当!」
ライティアは目を輝かせて言った。

「ええ、本当よ。もう大丈夫! 良かったわね!」
シルフィーはにっこり笑つて答えた。するとライティアは信じられないという顔をしていたが、目からはとめどない量の涙がこぼれ落ちていた。

「もう、みんなと一緒に働けるの? 外で遊べるの? 自由に外出してもいいの?」
ライティアが言つてることは全部、普通の人なら毎日の生活の一部にあるような自然なものだ。今までどれだけライティアが寂しい思いをしてきたのだろうと案じるのは容易に出来た。

「良かつたわね!」

2度目のシルフィーの言葉に、ようやく理解したのかライティアは号泣した。シルフィーに抱きついて。

「ありがとう! ありがとう!」

「本当に良かつた。でも、いつもあなたのおかげで聖玉も一つ手に入つて良かつたと思ってているのよ? あなたがいなければ焦つてできなかつたかもしれないし。」

「フフフ……そんなこと思つてないでせー!」

「バレたか……な~んてね! 本当にそう思つているから安心しなさい!」

2人は友達みたいに話していくのでそのままそつと家を出た。

……つもりだつたんだけど! ! なんで扉を開けた瞬間に村長+村人×40(つづか村人全員じゃないか?)がいるの? しかもみんなヘルゼーの顔を見た瞬間に

「ライティアは! ?」

て、異口同音つてこの事かつていうぐらい揃つたよ。だけどみんなが期待と不安の交じつた顔してるから、本当に心配してるんだなつ

てこうのは物凄く伝わってきた。

暖かい良い村だな

ヘルゼーの居た町じや考えられないことかもしない。村中の人々がみんなで一人を心配するなんて……。みんな働いて疲れてやつれた顔しながらでも生活のために働いていたし。

子供でも例外なく

倒れたら、看病ぐらいはするけどみんな自分のことだけで精一杯だつたから基本はほつておく形になってしまつ。

正直な所、ライティアが羨ましかつた。でも、みんなが答えを待つているから長い間ためてもいられない。

「大丈夫。呪いは消えたよ。今はシルフィーと話して。」「本当か?！」

第一声は村長。

「嘘ついてもしょうがないでしょ？」

そのヘルゼーが発した言葉は村人を不安から喜びに変えるものだつた。

わあつとあがる歓声。耳をつんざくほどの音だけど、ちゃんと祝福の気持ちは伝わる。ヘルゼーはその歓声に交じる言葉もちゃんと届いていた。

「よかつた！」

「おめでとうー！」

そして

「ありがとうー！」

こんなに感謝されたのは初めてかもしれない。正確にはヘルゼーではなく、シルフィーとライティアのことだけそれでも嬉しかつた。

まあバシバシ叩かれていたかっただけどね……。

「みんな！めでてえめでてえ！ライティアが解放されたんだ！今日は一日宴と行こうぜ！」

生きのいい比較的若めの男性が威勢よく言つと、みんながそれに答えた。

「畠仕事終わつたらな！」

現実的な一言のあと、ライティアの体に障るからと、みんな畠へ戻つていつた。

そして公約通り一晩中お祭りのような騒ぎだった。

回復したライティアも参加し、大盛り上がりだつた。一方シルフィーはとすると、もう少し寝ているといってベットへ逆戻りしていた。本当に大丈夫か心配だつたけど翌日元気にヘルゼーを叩き起こしききたので問題ないだろう。

そして

「お世話になりました。いつまでもこゝで止まつてはいるわけにはいかないので次の町にいきます。」

「いいえ、お世話だなんてとんでもありません！ウチのライティアを解放させて頂いて本当にありがとうございました！」

村人達と挨拶をかわし、ヘルゼー達はまた旅にでた。

第5話 危険な日食に襲われる村 後編（後書き）

感想・意見・批評等作者の成長のためくださるととても嬉しいです
！よろしくお願いします！

大橋結菜

第6話 シルフィー先生の魔法講座（前書き）

会話文が多いので読みにくいかも知れませんが読んで頂けたら幸いです。

第6話 シルフィー先生の魔法講座

シルフィーとヘルゼーは村を後にしてさらに旅を続ける。
「さてさて、じゃー魔法講座、よろしくお願ひします！」

「はあ～……。」

「そんな明らかに嫌そうな顔しないでよ～。」

「だつてさあ～……、だいたいあんたどこまで知ってるの？」

「え～っと。」

途端にヘルゼーは恥ずかしくなった。きっと自分はシルフィーの100分の1ぐらいしか知らないと思つたからだ。

「あ～恥ずかしがらなくてよろしい！」

シルフィーがヘルゼーの心情を読み取つたらしい。

「え？」

「アンタみたいな孤児じやあ魔法なんて感覚で使つてただけなんじやない？」

「なんでそれを……？！」

「しようがないから1から教えてやるか！～！」

「いいの？」

「それしかないでしょ～が、それともあんた独学で勉強でもする？
言つとくけどメチャ大変よ。独学は。」

「よろしくお願ひします！～！」

「決断早つ！」

ヘルゼーの思考回路は約2秒でその答えを出した。

「じゃあ基本中の基本。魔力をためやすい体質の人を1発で見分ける方法は？」

「髪と瞳の色！」

「正解！じゃあ何色が1番ためやすいの？」

「紫がかつた黒！」

「正解！んじやあ逆に1番ためにくいのは？」

「白ーー！」

「OK、基本は大丈夫みたいね。じゃあ赤と青だつたら?」「え……つと?」

「ふうー……やれやれね。黒に近いほうがためやすいんだから?」「ああ！青だあーー！！！」

「叫ばなくてよろしい。つかうるせえ。」「はい……すんません。」

女の言葉じゃねえ……。どちらかといふと……野郎だ。いいのか？こんなんで。

「じゃあ属性は何種類あるの？」

「火・水・氷・風・雷・聖・闇だから7種類？」

「一般的にはそう言われているけどまだあるのかもしれないのよ？最近はあまり他国との関わりを持たないから知られていないと思うけど噂では木や植物と会話ができるようになる魔法まであるらしいから。」

「それは何属性かわからないの？」

「微妙に共通点があるのは風なんだけど風属性ではないみたい。」「ふーん。じゃあまだわかんないんだ。」

「そーゆーこと。まあ一般常識があるか無いかを見定めたかっただけだから気にしなくて大丈夫よ。」「じゃあ玉と聖玉の違いつてなんなの？」

一瞬シルフリーがビクッと反応した気がしたが氣のせいだろう。

「玉は植物からとれるわよね？」

「うん。僕とシルフリーがあつたのもそこだつたし。」「聖玉は植物からはとれないわ。」

「ええ？！そんな玉聞いたことないよ？……まてよ、じゃあシリフリーはどうやってとつてきたのさ？」「聖玉ができたのは、遙か昔、まだ魔法文明が生まれてない頃……そうねえ人類があらわれはじめた頃にさかのぼるわ。」「そんなに？！」

「ええ。半ば伝説化してるとこもあるんだけどね。」

「うん。詳しく聞かせてね！！」

するとまるで語り手のようシリフィーは語り始めた。

「その昔各地に守護してくださる神々が居て皆は平和に楽しく暮らしていた。また、神々達の仲も良く、争いという言葉すら存在しないなかつた。そんな平和な世界にある時一人の男がこういった。『我々は皆、各々の神を祭り上げ信仰しているが、本当は誰が一番頼りになるのだろう？』神々も人々もそんなことは考えたこともなかつた。一番を決める必要はないと考えていたからだ。しかし、一度言われてみれば気になるのが人間の性。神達は各々治めていた人間達にそんな必要はないと悟したが一向に聞く耳を持たずついには神の今までの恩恵を忘れ争いを始めた。多くの死者と悲しみがうまれた。大地には悲しみと血、憎しみが蔓延し、皆つかれてていた。神々は世界の浄化のために長雨と干ばつを交互に繰り返した。そして神はこういった。『おまえ達人間が改心し、争いをやめるまで私たちはしばし人間界から手を引こう。いつか我らの思考を理解し、本当に平和な世界を皆が望むというならばその時は手を貸そう。過ちを繰り返してはならぬ。いつかわかつてくれるその時まで待つことにしよう。我らはしばし、眠りにつこう。』神々は世界から身を退いた。それでも争いはとまらなかつた。神が姿を現さなくなつてから、余計に激化した。もはや、怒りと憎しみの戦いになつていた。そんなとき一人の少女が現われた。少女はある力を生まれたときから持つっていた。『玉を生成する力』。彼女はその特殊な力により神の居場所を秘かにつきとめた。そして、神にこういった。『私が戦を止めましょう。神様。そのかわり私に力を貸してください。神々の聖なる力をこの玉にお納めください。私が解放し、人々の心を浄化します。』神は力を分け与え、その少女の活躍により、戦は終わつた。』

「じゃあその分け与えた力つていうのが今の聖玉につまつていいるっていうわけか。」

「そ～ゆ～こと。だけど聖玉自体に神が宿っているって言われてい
て、封印されてるからそれ自体を持ち出すことは不可能。だから今
はその聖玉の力を玉に移し替えて持っているの。だから今私が持つ
ている聖玉はコッピーね。」

「聖玉つて奥が深い。」

「まあ、歴史が非つ常～～に古～～ことはわかつた？」
「うん。でも、その女の子す～ごいね～一人で戦を止めちゃうなんて
さ～～」

「古文書によると、その子は神の力を完全には使いこなせなかつた
みたいよ？だから後世に闇がのこつたみたいだし。」
「ふ～ん。で、その女の子はその後どうなつたの？」

「亡くなつたわ。力の使いすぎでね。」

「可愛そ～だね、若いのに。」

「まあ神の力を使うんだもん。十分す～ごいわよ。」

そしてヘルゼーに一抹の不安がよぎつた。

「シルフィーは……死なないよ……ね？」

確認するかのように聞いてきたのでシルフィーは答えた。
「当たり前ぢやない？！死ぬわけ無いでしょ～。」

ヘルゼーに安堵の表情が戻つたのがわかつた。

第6話 シルフィー先生の魔法講座（後書き）

意見・感想・批評等作者の成長のため頂けたら嬉しいです。よろしくお願いします！

大橋結菜

第7話 機械仕掛けの街（前書き）

今回は普段になく短くなつてしましましたが、読んでいただけたら幸いです。

第7話 機械仕掛けの街

「さてと、魔法の話は一回終了…」

「えつ？ なんで？」

「次の町は少し問題があるからよ。」

「どうゆうつう？」

すると、シルフィーは玉でスクリーンをだし、町の外観を映し出した。機械が目立つ。とにかく目立つ。

「なに？ この明らかに機械ばかりの街は。」

「これが次の街、ハイ・ギアントよ。」

「まさに今の『じせい』を表してゐるような街だね。」

「その通りと言つたところかしら。」

するとシルフィーはふうっとため息を吐いた。

「なになに？ 何でそんな憂鬱そうな顔してゐるの？」

「ヘルゼー、一つ質問するけどこの2年前まで前の村みたいに農業が盛んだった街に見える？」

「はあ？ ！ ありえないよそんなの！ 前から機械ばかりの街だったんじゃないの？」

「それが違うのよね……。こんなに機械っぽくなつたのは、2年前からなのよ。」

「ええ？ ！」

「実はこここの街、町長が代わつて以来急に機械の導入が始まつたのよ。」

「何でまた急に。」

「先代の町長は闇否定派だつたんだけどね、その孫娘に代わつて以来どうも金回りが急によくなつたの。ということは闇からの援助を

受けているとしか思えない。つまり、闇を肯定してるとしか思えない。

「」

「ずっと思つてたんだけど闇って具体的になんなわけ？」

「誰にでもあるけど具体的に言つなら、光を撲滅させるためにできた、帝国があると聞いたことがあるわ。」

「帝国う？」

「ええ。どうやら心の闇に呑まれたもの達がさらなる闇を求めて集まる場所のよう。そこは、特別闇が深いポイントらしいわ。」

「へえ～。世界には僕の知らないことが沢山あるんだねえ……。」「私の知識でさえ世界の100分の1ぐらいしかないんだからあんたの知識なんてきっと100分の1ぐらいね。」

否定、したい……けどできない。くそぅ。

「まあいいわ。話を戻すわよ。」

「うん。」

「つまり、神に貢献する私たちが街に入れないかもしれないのよ。」「なんで??」

シルフィーは大きくため息をついた。

「どうせ馬鹿ですよ～。」

「開き直るんじゃないの～！」

「え～。」

「え～。じゃなくて。」

「むう……。」

「向こうにしてみれば敵でしょ？？私たちは、闇を滅ぼすためだけにいるんだから。」

ヘルゼーはポンッと手を叩いた。

「なるほど。」

「わかった？」

「うん。じゃあどうやって入るの？」

「それが噂によると常に検問がしかれてるうじして忍び込むのは無理。正面突破しかないみたいなのよね~。」

「は？！シルフィー、それ矛盾してるよ？」

「そんなことわかつてるわよ。だからあたしが言いたいのは問題が起ることは必須。下手すると戦いになるかもしれない。だから準備はしておいてって事よ。」

「要するにいつでも戦えるようにしておけって事？」

「そ～ゆ～こと。」

「じゃあ、また、修業？」

「なんだ、わかつてるんじやないー。」

「どうしてこいつ……嫌な予感つて言ひるのはあたつてしまつのだろ？」「大丈夫よ。次の街は国境に近いからまだまた歩かなきゃならないから時間はたつふりあるものー。」

なんであんなにいきいきしているのかはわからないが、ヘルゼーは少し不安を覚えた。シルフィーが恐いわけではない。ただなんとかく次の街に行くことが大変な事のように思えて仕方なかつた。このいじょうの無い不安は証拠もないのだがヘルゼーのなかではあきらかに大きくなりつつあつたが、シルフィーに打ち明けるわけにも行かず、ヘルゼーは一人でもうもつとするしかなかつた。

第7話 機械仕掛けの街（後書き）

意見・感想・批評等いただけたら嬉しいです。作者成長のためご協力お願いいたします！

これまでにこんなに疲労を覚えたことがあつただろうか？もうかれこれ1-8時間程歩いている。なのに、歩いても歩いても見えるのは一面に広がる草原ばかり。いつになつたらあの機械ばかりの街が見えてくるのだろう。

「シルフィー？ いつたいいつになつたら次の街につくの？」

「あと2時間くらいじゃない？ だいぶ近づいてきたし。」

ヘルゼーはもうくたくたで足がぼうになつていたのに、シルフィーはといえば少し汗をかいているぐらいだ。これも魔力の差か？ と、急にシルフィーがくるりとこひらをむいた。

「ほり、みてみて。」

「ん？」

シルフィーは地面を指差して言った。

「草原の土質が変わつてきたでしょ？ さつまでは砂地だつたんだけど……。」

「本当だ。なんか石みたいのがじろついてきた。」

「ひりいつた石がでてくるよになつたのは他でもない機械故ね。」

「どうこうこと？」

「機械に必要なエネルギーを放出する石があるのよ。見た目は普通の石なんだけどね、日の光にあてておぐだけで一度使つた石でもまたよみがえつて何回でも使えるって話よ。」

「ふうん。」

すると遙か遠くに街らしきものと前にいた村ほどではないが薄く暗い雲のようなものがたれさがつていた。

「シルフィー、あの薄暗い街？」

「街はあつてるけど薄暗くなんて無いわよ？ 疲れが相当でてきたんじゃない？ 幻覚を見るなんて。」

まだ。ヘルゼーには見えてシルフィーには見えないあの大きくなれ込めた雲。何度も田をこするけれどしつかり見える。シルフィーの言つとおりの幻覚とも思えない。

「あてど、街に入る前に野宿するわよ。」

「え？ なんで？」

「馬鹿ね。仮眠をとるのよ。言つたでしよう、いつ戦いが起きても大丈夫なように準備しておきなさいって。体力勝負になるとこりもあるかもしれないじゃない？」

「なるほどね。」

「実感はわからないでしようけど、あんたも少しは修業のおかげで体力もついてきたことだし。」

確かにそうだ。今までは10回玉の変形をするだけでバテバテだったのに今や25回は軽がるできる。

「まああとは、剣術とかいろいろ使いこなせるようにならなければ。今は十分だから。」

「誉めてもらうなんて初めてかもね……。」

そう言つたとたんヘルゼーは崩れおちるよつて倒れ、そのまま意識を捨てた。

気付いたのはそれから7時間後。シルフィーに起こされた。もう朝になつていて。

「仮眠のはずが、おもいつきり眠つてたわね。でもそろそろ出発しないとね。」

眠い体をむりやり叩き起こして歩き始めた。近づけば近づくほどわかる。この街が国境付近だということが。何気ない普通の1日の始まりなのに休む事無く警備員が検問を行なつていて。「苦労をまだ。で。この検問を正面から無理矢理突破するの？」

「ええ。最初は交渉するけれどきっと通してくれないと思うから。駆け抜けるしかないわ。もとから、通過するだけの街だもの。」

「無理があるよね……？」

「だからいつてんじやない。戦う準備はしておきなさいって。」

「平然と話せるシルフィーはすごいと思つた。」

そういうしてゐ間にだいぶ近づいたようだ。もう機械の音が間近に聞こえ、検問のレバーが上がつたり下がつたりする音や、笛を吹き交通整理をしている音まで聞こえる距離になつていた。

すると、予想通り一人の警備員が走つてこちらに走ってきた。

「君達イ。この街の人間かい？」

「違います。」

「困るなあ。この街は今町民以外立入禁止なんですね、お引き取りください。」

口調は丁寧だが、明らかに嫌そうな顔をしている。

「通り抜けるだけなんです、隣の国に行きたいので。」

「どんな理由でも駄目なものは駄目なんだ。そういうことだから。」

それでもシルフィーは食い下がる。

「何故駄目なんですか？これじゃあ隣国に観光にもいけやしない。」

「うとう警備員がキレたらしい。」

「あのなあ！！文句なら俺に言わずに町長にでも言えよ！とにかく駄目なんだ！さつさと帰れよ！こっちも暇じゃないんだ！」

するとシルフィーは待つてましたといわんばかりに、宣言した。

「わかりました。じゃあ、私たちは街に入つて町長に話をつけてきます！では！」

そう言い放つと検問を無理矢理ブチ破り強行突破して警備員の制止を振り切り走りだした。

「オイ待てエエ！？」

「シルフィー！やつぱり無茶だよ。こつか捕まつちやうよー。」

「それが目的よー。」

「はあああ？！」

ヘルゼーは意味がわからず叫んだ。

「街の中心に向かうわ！そこに町長がいるばずだから、そこで帝国に宣戦布告するわ！あなた達を滅ぼす使者が現われたつて事をしらせてやるのよ！」

「何でこの街なの？！」

「闇に堕ちた人がたくさんいるこの街から逃げたらたいしたもんでしょう？！それを実践して、闇に、帝国に思い知らせるためよ！」と、そうこうしている間に街の中心街を走っているようだ。機械の街の機械が急に増えた。

そして、一際大きな工場の前に出た。どうやらここが町の中心らしい。

と、思い立ち止まつた瞬間、上から声が聞こえた。

「あなた達が犯人のようね。」

女性の声だ。あまりに突然だつたので2人とも歩を止めてしまった。上を見ると巨大なビルのテラスからヘルゼー達を見下ろす人がいた。髪は白。シルフィーより少し長いらしく腰の辺りまで伸びている。目は灰色。もしかしてこの人が……

「町長？！」

「正解。」

すごく美しい人だと思つ。だけどすゞく冷たい瞳をしているように感じられた。

「許可もなく私の町に堂々と入つてくるなんて良い度胸してるわね。」
「明らかに高圧的な態度。あゝあ。こりやシルフィーとは相容れないタイプだな。

「私たちはこの街を通過したいだけ。特に戦つつもりもあなた達とも争うつもりはないわ。」

そんなシルフィーの言葉を聞いた瞬間、いきなり笑いだした。

「フフ。あはははは！ははは！何を言いだすの？あなた達も知つてるんでしょ？この街は帝国を受け入れてるつて事。見るからにあなたたち、魔力にあふれているみたいじゃない？とくにあなた。そんな

なつややかな黒髪なんてみたことないわ。でも、ここは闇の街。あなた達は明らかに神の使いみたいじゃない？その姿勢からしてね。まるで伝説に出てくる少女のよう。ここことは私たちの敵。つまり……」

すると、突然町長が手をたたいた。途端に、四方八方を武器を持つ町民達にかこまれた。

「ここで殺しておるべき存在よね。いつか牙をむかれたら困るし。だからあなた達にはこの街を通る資格がないのよ。」

第8話 町長登場（後書き）

意見・感想・批評などいただけたら嬉しいです。作者成長のためよろしくお願いいたします！

大橋 結菜

第9話　闇に囲まれた街、光を愛するもの。～1～（前書き）

書きためることができないので不定期になってしまって申し訳ありません。なるだけ早く書いて投稿いたしますのでこれからもよろしくお願いいいたします！

第9話 間に馳せた街、光を愛するもの。～1～

シルフィーは突然1歩前に踏み出して町長に言い放った。

「私たちにこの街を通る資格が無いですって、ふざけんじやないわよ。私たちは私たで勝手に通らせてもらうわ。」

「だから私たちはそれを許可しないって言つてるのよ！魔力が強いとか聖なる力を操れるとか関係なくね！」

「なによ。そんな事言つて。止めたいなら止めれば良いじゃない。」

「シルフィー、争わないほうが……」

「ヘルゼー、少し黙つてて。」

「はい……。」

女と女の戦いだ。まあいわゆる世間一般で言われている“修羅場”というやつだ。両者の背中から鬼がでてる。

「ええ。もちろんそうさせていただくな！」

すると、シルフィーが小声でヘルゼーに伝えた。

「（私の服の袖をつかんでて！）

「え？」

「（いいから！）」

ヘルゼーがシルフィーの服の袖をつかむと同時にシルフィーは何か唱えた。その瞬間2人は薄い光のベールにつつまれた。

「かかれ！」

町長が命令したとたん周りにいた町民が一気に襲い掛かってくる。

「シルフィーくるよ！」

サツと玉を取り出したヘルゼーをシルフィーは止めた。

「シルフィー？」

「ちょっとこのままでいて。大丈夫だから。」

ヘルゼーにはまったく意味がわからなかつたが、とりあえず意を決してその場に立つた。シルフィーが大丈夫だと言つているのだから信じようと思つた。けれどそんな2人を殺すべく武器を持ち、武装

した人の群れが容赦なく襲つてくる。

斬られる！ そう思い目をつぶつた瞬間だつた。

バチン！ 激しい衝突音の後激しい痛みとともに温かい液体がヘルゼーから流れ出てくると思つた。

が、しかしいつまでたつても衝撃も痛みもなかつた。 そつと目を開けると襲い掛かってきたはずの町民の手が焼けていた。

「あ……れ？」

町長の顔が強ばると同時にシルフİYEーが笑つた。

「あ～れ～？ 痛くも何とも無いなあ～？」

シルフİYEーがおどけてみせると、

「なつ～！ どういうこと？ ！」

と町長が叫んだ。

「私は神からの使いよ～？？ 間に汚されたあんたらなんかがこのあたしに触れるわけ無いじゃない！」

そんな裏技ありかよ！ と突つ込みたくなるのを我慢して、事の成り行きを見守ることにした。

町長の顔が一段と強ばる。

「卑怯な！」

「卑怯～？ 別に生れ付きだから仕方ないし～。 といつ～！ と勝手に通りま～す！」

高らかに宣言をし、また更に走りだす。

「ヘルゼー、できるだけゆっくり走つて！」

「なんで？ ！」

町民がどんどんせまつてきた。

「言つたでしょ～？！ 一度捕まつたほうが良いの。 大丈夫、あたしの考えだと牢獄には闇に染まりきれてない人が幽閉されてるはずだわ。 きっと男女でわけられて。だから、その人たちを解放するのよ。

「

「でも、ぼくらも捕まつたら身動きできないんじゃない？」

「あなたにも光の守護魔法をかけてあるから平気！鎖くらい簡単に外せるはずよ！」

「ここまできたら仕方ないか！」

町民が棒を振り上げる。

「あれ？でもさつき攻撃あたらなかつたよね？」

「あれはね、実は一回限りなんだ。魔法なら何回でも弾く」とはできるんだけどね、物理攻撃は一回だけなのよ。」

「なるほど。じゃあこの棒は当たるわけね。」

「やけに冷静ね。痛いわよ？一応、本気で殴つてくるから。」

「もう慣れっこだから大丈夫だよ。」

「え？ ビーゆー。」

その瞬間二人同時に殴られ意識がとんだ。

冷たい感覚で目が覚める。

「あれ？ここつて……？」

「そうだ。殴られて氣を失つていたんだ。って言つことはないは……」

「牢獄……か……。」

まだ頭がガンガンするがヘルゼーはシルフィーに言われたとおりの行動をすることにした。

鎖は本当に簡単に外れた。

「こんな簡単にはずれていいのかよ……。」

とりあえずヘルゼーは檻から兵隊がいるか覗き込んでみた。角に一人。通路に巡回兵らしき兵が一人。なるほど、街の検問に回っているせいかこの警備は手薄だ。

「こ～ゆ～ときはチャンスだな？」

ニヤリと笑ったその表情は悪人そのものだった。

ヘルゼーは持ち物の殆どを没収させていたが、口腔内に隠しておいた小さな玉はばれていなかつたようだ。小さな飴玉のような玉を口の中から取り出し念じる。小さめで、働きは普通の玉と少し違い、生物に擬態し主人の命令したとおりに働く。

「よし。蝶に擬態！」

すると玉はひらひらとまるで小さな宝石のよつた輝きを持つた蝶に変身した。そして……

「兵隊の前をひらひら舞うんだぞ。きっと欲の深い奴らしか居ないからめずらしいものほしさにつけられるから。そしたら僕のいる場所からはなれて兵隊を遠ざけるんだ。いいね？」蝶はこくりと頷いてひらひらと舞去つた。

そしてヘルゼーの予想通り兵隊は引っ掛けた。

「お？ なんだこの蝶は！？ こんな大きくて綺麗な蝶が居たのか。これは高く売れそうだ！」

まさかこんなに簡単に引っ掛けかるとは……。

「おわあ？！ お～い！ そいつ捕まえてくれ～！ 金は山分けにしてやるからよお～！」

「いい金になるんだうな！」

「当たり前だろ？ そんなの見たこともねえ～きっとレアさ～！」

「なるほどな。それ！ お？ 以外と早いな……。」

兵士が蝶と格闘している間にヘルゼーはそつと檻から抜け出し、探索してみることにした。牢獄のなかは薄暗く、唯一の光は火属性の玉が放つ炎の怪しげに揺らめく光だけだ。さらに地下室のようなので壁は冷たく、湿気でじめじめしていて触ると水滴が付く始末だ。

「ここなどここに閉じ込められているなんて……。あんまりだ。」
と、一つの檻の前に立つた。中に誰かいる。が、暗くて見づらい。
ヘルゼーはそつと声をかける。

「あの……」

「誰？！兵隊じゃないのか？！」

「あまり大きな声をださないで。僕はヘルゼー。先程捕まつたけど
逃げてきたんだ。きみは何か罪を犯した人かい？」

「とんでもない！僕はただ普通に暮らしていただけさ！明るく樂しく。
でも、正しいことを正しいうつたらここに連れてこられた
んだ。反省しろって。」

声から聞くに少年だ。年は10歳ぐらいだろう。と、やつと顔を出
した。

「お兄ちゃんも悪い」としてないんでしょう？」に捕らえられた人
はみんなそうだもん。」

予想どおり10歳前後の少年だ。髪も瞳も鮮やかな緑色をしている。
が、そんな鮮やかな色に不釣り合いな粗末なぼろぎを着せられて
いる。

「さつき大きな黒い蝶がとんでつたよ。黒色なのに模様がカラフル
だつたね。紫とか黄色とか。お兄ちゃんが兵隊をまくために作つた
んでしょ？頭良いねお兄ちゃん。」

「そんなことないさ。」

「お兄ちゃんは僕らを助けてくれるの？」

「当たり前さ！そのためにきたんだから。」

「そうなの？」

「そうとも！」

「じゃあ、僕らはどうしたらいい？」

以外と冷静で頭のいいやつだと思った。ふつうなら早く助けてとか
いうはずなのに……

「そうだな、一回この監獄の地形と兵の配置を探つてくるから！」

にいてくれ。分かりしだいここに戻つてくるから、安心して待つていて。」

「信じるよ、お兄ちゃんのこと。なるべく早くしないと監獄守つて言つ強いのがでてくるから気を付けた方がいいよ。それから、僕少しねら魔法も使えるんだ。だからお兄ちゃんがいないことばれないうに幻覚を作つておくよ。」

「そんなものまで作れるのか？」

「うん。僕の魔法は玉は必要ないんだ。遠隔操作の幻魔法だからね。」

ヘルゼーは話の8割り方わかつてはいなかつたが恥ずかしいのでわかつたふりをして、うなずいた。

「わかつた。じゃあ後でな。」

「あー、ちょっと待つて！この監獄に1人お爺さんいるはずなんだ。もしここから逃げ出すときはそのお爺さんを出してあげて！先代の町長さんなんだ！いまはこの監獄のどこかに閉じ込められてるはずだから！」

「わかつた！」

ヘルゼーは再び走りだした。

監獄内を歩いてみるとなかなか広いが造りは簡単だといつことがわかつてきた。

四角い箱のような形で造られてて階段が3ヶ所。

一つの通路に罪人と称される人が入る檻が10スペース。

1フロアで40人収容可能だ。

だが、これだけでは少ないはずだからきっと地下5階ぐらいまでに及んでいるだろう。

体感温度からしてここは地下3階ぐらいか？まああれだけ騒いだから奥深くに入れられて当然だろう。と、シルフィーはきっと地下5階に入れられているだろう。シルフィーのことだからさほど心

配は必要ないと思われるが、拷問などを受けていないかだけが心配だった。あんな白い肌に傷が付いたら目立つてしおうがないだろうし。

さて、さつきの少年が言っていた老人だがこのフロアにはいなさそうだった。きっと最深部に入れられていることだろう。お年寄りは大切にしなきゃならんのに……。

一応、フロアごとに逃がしに行くことにした。この人数でぞろぞろ逃げたらさすがの兵も気付くだろう。また少年に声をかける。

「おい。戻ってきたぞ！」

「お爺さんは！？」

「このフロアには居ないみたいだ。フロアごとに逃がすからまずはおまえらだ。今鍵を開けるから待つてろよ。」

「鍵？監獄守にあつたの？マスターキーは監獄守が持つてるんだよ？」

「鍵なんていらないさ！いまの僕なら……」

ヘルゼーは鍵のかかっている錠に手をかけた。すると、ガチャリ。思つたとおり。シルフィーからは直接聞いてないがこの町は聖属性の力に果てしなく弱い。だから鍵がなくても簡単に開く。

「光の守護魔法か何か？」

「詳しいね。その通りだよ。」

「一応、魔法学校に通つてたから。」

「なるほどな！そらあいたぞ。まずは僕についてきてね。」

「他の人も逃がすんでしょ？僕も手伝うよ。できるだけ多くの幻影を作つてばれないようにするから、僕もお兄ちゃんに最後までついていくよ。」

「大丈夫か？」

「うん。僕はグアース・ハイフェ。お兄ちゃんは？」

「ヘルゼー。アドベア・ヘルゼー。よろしくな！ハイフェ。」

ハイフェとヘルゼーは共同作業でどんどん逃がし始めた。幸い、兵隊はあの蝶のおかげでこのフロアにはあまりいなくなつていた。

ヘルゼーは檻の中にいる人たちは子供ばかりだということに気付いた。なるほど純粋で素直な子供はこの町にとつては邪魔だということ。

しかし、あまりのんびりはしてられない。できるなら、シルフィーの手助けに行つたほうがよさそうな気がしてきた。

ここに兵士が少ないのは蝶の力もあるけどシルフィーのいるところに集まっているからなのかもしぬれない。とにかく万が一のことでも予想して早めに行動することにした。

第9話　闇に駆けた街、光を愛するもの。～1～（後書き）

意見・感想・批評等いただけたら嬉しいです。作者成長のためよろしくお願いいたします！

大橋 結菜

第10話 間に墜ちた街、光を愛する者。～2～

「う……ん？」

ようやくシルフィーは田を覚ました。ヘルゼーとは違い一発で状況を判断した。

「地下5階ぐらいかな？ 最深部だと嬉しいんだけど。」

のんきに伸びをする。決して今の状況がわかっていない訳ではない。ここからいつでも抜け出せるという自身があるのだ。

今のシルフィーの状況はこうだ。

手錠に足かせをつけられ壁にはりつけになつていて、首にまで首輪がはめられている。

しかも頑丈な厚い鉄製の物でわざわざ魔力を吸い続ける性質の玉まではめてあり、魔法も使えないようなひどい状況だ。が、問題は無い。魔力を吸われたところでシルフィーの余りある魔力が果てるはずが無い。この街にくるまでの間にもしつかり基礎練はしていたし、逆に魔力は増幅していた。魔力の使いすぎで倒れることは聖玉を解放するとき以外はまず無いだろう。

すると、目の前に1匹の蝶が飛んできた。

「（これって確かヘルゼーの……）」

そして早く手錠や足かせを外せと態度で示された。

「（もう……ヘルゼーの分際で……。）」

だが、あまりの慌てぶりなのでひとまず従うこととした。不本意ながらも。

シルフィーは魔力を吸われてはいるものの、脱出するのには充分な魔力があった。そして、全身に行き渡つている魔力を右手に集め、まず右手を自由にした。そして左手についている手錠に軽く触れた。光の守護魔法のおかげであまり魔力を消費せずに全ての足かせをはずせた。

すると、急に辺りが慌ただしくなった。

きっとこの蝶を探しにきた馬鹿共だろ？

が、なぜか蝶がかなり焦つてシルフィーにもとの体勢に戻れというので同じ格好をした。すると蝶が自ら擬態を解き、鎖や足かせに擬態した。これならいつでも戦闘体勢に入れるとシルフィーは思った。と同時にこの玉に自らの意志が入つていて驚いた。ヘルゼーの体内にいたのだからヘルゼーの意志が入つているのは不思議ではないのだが自らの意志がある玉を見るのは初めてだった。

が、そんな穏やかな状況では無い様だ。急に兵達が集まり、通路の脇に整列をした。何が始まるのかと見ていたら角から女性と思われる人が現われた。髪は白でベリー・ショートの天然パーマ。瞳の色はクリーム色をしていた。背が高くて騎士隊長の様な格好をしている。

「全員、敬礼！」

ビシッと詰つ音が聞こえるぐらい綺麗に揃つた。

「ご苦労さま。」

しかも、シルフィーの檻の前で止まり、中に入つてきた。

「君が街を荒らした犯人だね？ずいぶん簡単に捕まってくれたじゃないか。……何が目的だい？」

「別に？あなたの方の町長さんにも言つたけど、私たちはただこの街を通りたかっただけよ。」

「本当か？」

「ええ。」

「ウソだな。」

「はあ？！何でよ？！」

「貴様！言葉遣いに気を付けよ！監獄守様だぞ！」

「関係ないわね……！」

「ごみを効かせて言つた。なぜかひるんでくれた。」

「おつお前！この状況が分かっているのか？！」

「わからないとでも思うの？」

「貴様……！？」

「貴様……！？」

「騒がないでもらえるか？それとも…………死ぬか？」

「すみませんでした！！」

「わかつてくれればいいんだよ。ところで、君が良ければなんだが

……。」

視線をシルフィーに向けながら言った。

「何よ？」

「私と戦つてみないか？」

「はあ？！！」

「君の魔力は飛び抜けている。本気を出せばこんなちんけな監獄ぐらい簡単にふきとばせるだろ？まあ、だから玉に吸わせてるんだけど。力試しをさせてはくれないかね？」

「私へのメリットは？」

「ふむ。ここから出してやる。」

「交渉決裂ね。」

「何？」

「私がここから出るのは当然よ。命賭けてるし、魔力吸われて弱つてるところだし。」

「言つてくれる。」

「私の望みは私を含むこの監獄にいる全員をここから出すこと。ソレが条件ね。」

しばらく考えたあと結論を出したようだ。

「…………わかつた。そりやう。」

「で？形式はどうするの？」

「3回戦としようじゃないか。」

「なんだってかまわないわ。」

「種目は、フロンシング・魔法・鬼ごっこ」といふんじゃないか。」

「2つはいいとして、何で鬼ごっこなのよ。」

「もちろん条件付きだ。この監獄にいる兵士300人に一回も触れ

られないことと、最深部にお前等の荷物を置いておこなう。もちろん、罠とかはナシだ。」

「シルフィーは軽く微笑んだ。

「いいでしょ。わかつたわ。」

「じゃあ早速1回戦の始まりだ。フーンシング場に行くぞ。」

フーンシングか……。やつたこともないし、正直勝てるかどうかはわからない。けれど負けるわけには行かない。負けたらそのあと私の待つのは死だ。一応練習風景をみてなんとなくルールをつかむ。「やつたことはあるのか?」

「ないわ。」

「そうか。ではこうしよひ。初心者にはハンデだ。お前は魔法の使用を許可しよひ。」

私の魔力を計るつもりだ。2回戦目に備えて。だが、シルフィーは挑発に乗ることにした。

「あら、いいの? それはありがたいことだわ。」

「では、始めるぞ。」

戦つてみてよく分かつた。こいつはかなりのてだれだ。素早い攻撃&リカバリー。相手に隙をあたえさせない。以外と戦いづらいな……。でも、こ一ゅー場合は!

シルフィーは攻撃をひらりとかわし攻撃させると見せ掛け、フェイントを入れたのち相手の顔めがけて風を発生させた。簡単に言えばつむじ風。相当な勢いに相手もさすがに呑まれて……

「チヒックメイトよ。」

「まさかこんなやり方で負けるとはね。でも、まだまだこれからが本番よ!」

少しシルフィーは驚いた。なぜなら今までにシルフィーの魔法を目の前にしてひるまない奴は初めてだつたからだ。

「そうね。でも次は負ける気がしないわ。」

「そうかしら?」

不敵な笑みを浮かべて「こりからしてなかなか魔法にも自身があるようだ。

「ああ、もし2回連続であなたが勝つても、3回戦目まで戦つても
らうわよ。」

「別にかまわないわ。」

「あら、以外ね。間違いなく拒否されると思つてたんだけど。」

「どうせ、私に拒否権はないでしょ?」

「先読みつてやつ?」

「どうでもいいわ。さっさと始めましょ。」

「そんなに焦らなくたつていいじゃない。」

「私たちには時間がないのよ。こんなところで止まつてられないの。」

「ふうん。あたしには関係ないけどね。」

「そうでしょうね。」

「戦いの説明に入るけど、魔法対決は武器の使用を一切認めない純粹な魔力勝負でいかせてもらうわ。まあ、魔法で作った武器なら使用は許可するけど、普通の武器には強度が劣るから余りいい策ではないわね。あとは特に無いわ。何か質問は?」

「特に無いわ。」

「じゃあ、始めるわよ。」

「さつさときなさい。先手は差し上げるわ。」

「なめられたものね。」

冷笑しながらも相手の魔力が高まつていくのを感じる。空気がぴりぴりしてきた。そして、自分の回りにシールドを作りそこから刃を何百本とうちこんできた。だが、シルフィーからしてみれば甘すぎると攻撃だ。

「ぐどい。」

そう一言言つと自分の身の回りに光の魔法陣を描き、そこから大きな光の刃を3本出しそのまま床を伝わせて降り注いでくる刃を跳ね

返した。

「まさか、こいつも簡単に破られるとはね。でも、まだまだこれから！」

「今度はこちからかいさせてもらいつわよ。」

すると、シルフィーは自分の両手に縁の光の玉を作り、一つに合わせた。まるで無重力空間にある水のようなかんじだ。

「簡単にあてるだけじゃダメよね？」

さらにそこから一つの角をもつた縁に輝きを放つ馬ができた。ユニークーンのようだ。

「それをどうするの？」

相手だつて黙つてみてはいない。シルフィーがユニークーンを作つている間に、黒い大きな球形をしたエネルギーの固まりを作つていた。そして、さらにそれを弓のような形に変化させてシルフィーに打放つた。

が、その美しいユニークーンは蹄を一回ならしだけですべてを消し去つてしまつた。

「なかなかやるのね。」

「この子はそれだけじゃないわ。」

そういうとシルフィーは相手に向かつて指を差し何かを伝えた。するとユニークーンは相手にエネルギー砲を口から放つた。

「ちよつ！」

半端無い威力。簡単に言つと幅の広いレーザー砲を撃たれた感じだ。相手はギリギリで避けたが服が軽く焼けていた。

「よく避けたわね？いいわ。名前を聞いてあげる。」

魔法などのバトルにおいては名乗らないことが多いのだが、相手を認めたときは別だ。名前を聞き尊敬の念を表す。

「レイラよ。」

「簡単で呼びやすくていいんじゃない？」

シルフィーは大分余裕だったがレイラはかなり追い詰められていた。なぜあんな大きな魔法を使い続けて平気で立つていられるのかが不

思議でしかたなかつた。

第10話 間に墜ちた街、光を愛する者 ～2～（後書き）

大変遅くなつてしまい申し訳ありませんでした……受験がよつやく終わり、一段落したので、また書かせていただきます。今までのように更新停止にはならないと思いますが、不定期なのは許してください。しない学生なので。では。

大橋 結菜

第11話 間に墮ちた街、光を愛するもの。～3～

が、しかしレイラは落ち着いていた。大丈夫まだ気付かれてない。それをよそにシルフィーは欠伸をしていた。

「何か隠し玉でもあるのかしら？このままじゃつまらないまま終わりよ？」

自らのユニコーンを見てなづけて、くじくじと毛をいじつてい。そして、レイラは勝利を確信した。

「かかつたわね！」

「は？ 何が？」

シルフィーは全く分かつていない。

「私が簡単にやられるとでも思った？」

不意に後ろから同じ声がする。シルフィーがあわてて後ろを向くと

「なつ！ ドーユーことよ！？」

後ろにレイラがいた。がしかし、前にもレイラはいる。

「さあ～てもんだ～い！ 何で同じ人間が居るんでしょうか？！」

「まさか……幻魔法？！」

「せいいか～い！ 頭良いねえシルフィーちゃん！」

そうだ。すっかり忘れていた。先代がこの街、いや、村だった頃野党が多くて幻魔法を強化してこの村の入り口をわからなくして必要な人以外は入れないようにしてこの村を守ったんだ。仕組みは分からぬけど確かに村人と力を合わせて守つたつて本には書いてあつたはず。ということは間違いなくこの街の人はたいてい幻魔法が使えるはず……。

「ちつ！ やられた。」

「魔力の無駄遣いありがとさん！ ここからが本番だよね～」

シルフィーは焦った。そもそも幻魔法というのはその物体に似せた実体の無い抜け殻のようなものを造りだす魔法だ。つまり能力の無

い者が使うと表面上は構成できても、立体化ができなかつたり反対側が透けて見えてしまつたりと、個々の能力の強さそのものが表れてしまうというシビアな魔法なのだ。しかし能力の高い者がこれを使用すると、実体があるわけではないはずなのにその者に触ることができたりする。仮にレイラの様に能力のある者が自分を写取り、この魔法を使用すると、自分の使える魔法の少し弱まつた物が自分の幻が使えたりするのだ。（ちなみに感情は共用するので自分の分身が勝手に暴れだしたりなど暴走することは無い。）こいつが監獄守になれた理由がよくわかつた。

「……コイツ、予想以上にデキるんだ……。」

「やつと理解してくれたみたいね。それに幻魔法は普通の魔法とは違つて玉を使用しなくても使える術なの。低級魔法と同じ扱いになるけど、たかが低級とはいえない程使いようによちや使える魔法よ。読みが甘かつたわね。確かにあなたのほどばしる魔力は絶大。でも、こーいう時はあまり意味を成さないわね。」

イラつと来るけど仕方ない。コイツはデキる。それに今までのは幻つまり、本来の力を出しているものではない。それでの強さ。本物となると……

「強さも今までの2倍つてわけ？」

「それはどうかしら？」

奥からもう一人のレイラが現れた。いや、よく見渡せばもう一人が出てきた途端シルフィーの周りにはもう何十人もレイラがいる。

「化け物？」

「人聞きの悪い。私はこう見えても魔法は得意なの。あなたには及ばないけどね。少しの魔力で何人も作れるつてわけ。」

が、シルフィーは先程までの焦りは消えていた。ある良いことを思い出したのだ。

「確かに、これだけの相手をするのは大変ね。」

「あら、意外と焦つてないわね。」

何十人と居るレイラの中の一人が言う。

「ひとついいことを思い出したのよ。」

「何かしら？」

「幻魔法は所詮低級魔法っていうことよ。」

「なにを……！－私を侮辱するつもりか？－この状態でビリになるのかわかつていいのか？！」

「別に。侮辱なんてしてないわよ。ただね、気つ、いけやつたのよ。この魔法の弱点に。」

「どういうことよ？！」

「あなたの分身が使った魔法の元はあなたよね。結局、弱まつたものとはいえたあなたの魔力を吸っていた事には変わりないわ。つまりあなたとあなたの分身は……」

するとシルフィーはいきなり田の前にいたレイラの分身の一人にグーパンチをお見舞いした。

バキッ！軽快な破壊音と共にわずかだが鼻血が出た。それと同時に周りにいたレイラも少なからずダメージを受けた。もちろんのことで相手はキレている。

「…………んにすんのよ！－！」

「実験。つていうか確認ね。これで確証も付いたわ。ダメージも一様に負う。」

「フツ、流石ね。」

鼻血を拭いながらレイラが言う。

「その通りよ。でも、なぜこれを知つておきながら、こんなにたくさん自分の分身を作つたと思つ？－！」

「知らないわよそんなの。」

「守りきれる自信が有るからよ！－自分の思い描く最高の状態であなたを倒す自信が！－満ち溢れていなければこんな危険な賭けなんてしないわ！－いえ。できないわよ！－！」

レイラ自信がかなり高ぶつたらしい。何人かはもう戦闘体勢に入っている。そして、キレたレイラ達は一斉に先程の魔法でも見せた、黒い弓で一斉に攻撃してきた。そして、シルフィーは目を瞑った。

死を覚悟したわけではない。もしもシルフィーに当たつたら、いくら幻覚の作ったものにせよ、大怪我は免れないだろう。レイラほどの能力者なら、もしかしたら物体に限り、実体化して作り出すことが可能かもしれない。というよりもうしていることだろう。それなのになぜ目を瞑つたか。それは、シルフィーの研ぎ澄まされた魔法の感覚で半体が放つた弱い弓矢と、本体が放つた強い弓矢を感覚で探し出そうと思ったからである。目を瞑つたのは、見えてしまうといくらシルフィーでも恐怖心が芽生えてしまうからだ。しかし目を瞑ればそこには一本の黒い弓矢。他の弓矢は軌道を読んで大体で避けていくしかない。何百本と飛んでくるのだから多少当たつてしまうのは仕方無いので諦めて、急所だけをはずしていく。

「嘘……。何で一つも当たらないのよ……。ならば……！」

痺れを切らしたレイラがとうとう自ら弓矢を放つた。その瞬間。バシッ！ 摩擦の熱ももろともせず、シルフィーがつかみ、目を開いた。

「見つけたわ……。」

体からの出血が生々しい。どれもみんな紙一重で避けていたのだから仕方ないが、どう考へても痛い。脚や腕、肩など至る所から出血している。綺麗な白い肌だからこそ余計に目立つてしまう。特に先程の弓矢をつかんだ手は赤くはれ上がり血が滴り落ちていた。

「何で平氣で立つていられるのよ……。」

言葉を無くしたレイラ達は攻撃をやめた。

「北東の方角から今までよりも強い魔力を持つた弓矢がちかつ、いてきた……。あなたね。」

シルフィーは一番窓側にいるレイラを指差した。

「なんて……魔力なの……。」

第12話 間に墮ちた町、光を愛する者（4）

レイラは愕然とした。それと同時にシルフィーかレイラを見て鬼のようない形相で言い放つた。

「あんた等にみくびられるほどヤワな鍛え方してないわよ。」

レイラ達の顔は一様に恐怖の顔へと移り変わった。そしてそこがレイラの限界だつたのだろう、次々にレイラの分身たちが消えていく。そして最後に残つた一人がシルフィーが言つた通り、北東の窓辺にいたレイラ。コイツが本物だ。

「クソッ！！」

すると目眩でもしたのかレイラがそこに座り込んだ。

「ふうつ。これもチェックメイト。2勝目ね。」

「まさか私がここまで追い詰められるとはね……。でもたぶん次はあなたでも助かるかどうか分からぬわね。」

「どういう意味？？」

「そのまんまよ。」

「たかだか鬼じつこでしょ？」

「あなたは体のどの部分でも誰にも触られちゃだめなのよ。」

「もし触られたら？」

「あなたの負け。この場所に転送される仕組みになつているわ。あなたにも呪い似た魔力をかけてあるからね。」

「それでこんなに体が重いのね。てっきり魔力でも吸われ過ぎたのかと思つたわ。」

「フツお気楽ね。例え髪の毛一本でも触れられたらここに転送されるわ。ちなみにその時はいくらあなたでも助からないような処刑台も一緒に用意しておくから。」

「それは怖いこと。」

「ぜんぜん怖がつてないんだけど。」

「フフ。まあいいわ。ところでこの魔法はいつになつたら解けるの

？」

「心配しないでつて敵に言うのもなんだけど、この監獄を出れば自動的に解けるようになつてるわ。というか私の魔力じやそれが限界の範囲よ。ここまできて嘘はつかないから安心なさい。私も少し回復したらあなたを追い詰めに行くから覚悟しなさい。それから、この最深部、今も奥まつた場所だけどその更に奥の奥の奥にあなた達の荷物が置いてあるからそれを取つてから行つたほうがいいんじゃない？この監獄は外からの魔法の干渉を受けない石で作られてるから一度外へ出てから取ることはできないわよ。まあそこにも兵士はいるだらうけどね。」

「「忠告ありがと。でもそろそろ行くわ。
せいぜい少ない命が長引くよつにね。」

今まで戦つていたフェンシング場は捕まつていた部屋よりも浅い所にあるようだ。捕まつていたときよりもこの部屋は暖かく感じられたからだ。深い所に行くには、空気の流れを読むしかない。空気が流れている方は、どちらかといつと出口に近いはずだ。つまり、その逆方向。空気の流れがあまり無く、よどんでいる方に行けば、きっと最深部に出れるはずだ。

方向はわかつた。しかし今最も重要な事はこの流れ出る血液をどう止めるかだ。先程の矢の嵐を食らつて以来、肩に当たつた一本の矢が思つていたよりも深くシルフイーの肉を裂いていた。肩から血がポタポタと滴り落ちる。刺さつたわけではないので、腕は使い物にはなるがこの出血の量では敵兵に自分の居場所を教えてはいる。ものだ。あいにくシルフイーは回復魔法が使えないの（昔挑戦したが傷を広げる結果になりタイプが合わないという結論が出された。）止血すらままならない。仕方ないので玉で包帯を作り出しそれを巻いておいた。簡単だが多少の役には立つだろう。止血はできていないだろうが、少なくとも血が床に滴り落ちることはなくなるはず。と、そんなことを考えながら長く暗いジメジメとした廊下を歩いていると階段を見つけた。ラッキー！目を輝かせたシルフイーだつ

たが、下から声が聞こえてきたので慌てて隠れる場所を探す。が、無い。

「ど、こに逃げたんだ？！」

「こ、の辺に居るはずだ！――何が何でも探し出せ……！」

「でも、監獄守様でもきつい戦いになつてるんだろ？俺らなんかで役に立つのかなあ？？」

会話の内容からして、まちがいなく兵士だろ？

「時間稼ぎくらこにはなるだろ？よ。」

階段を上つてくるようだ。カツンカツンと靴の音がする。ヤバイ。

カツン…カツン…

ど、うしょつ。これはまさしく絶体絶命……そつこいつしてこる間にも兵士は階段を上る。カツン…カツン…カ…

「こ、ちよーーとあ早くーー！」

ど、こからとも無く女性の声が聞こえる。女兵士かと思ひ慌てて振り向く。するとそこには……

「え？？」

一方ヘルゼーはハイフェと共に地下1階まで来ていた。ヘルゼーが檻をの鍵を開け、ハイフェが幻をつくり中に居る人間を逃がす。シルフィーの居るところと違いここは割りと光があり明るいので魔法を使わなければ簡単に逃げた事がばれてしまうのだ。が、そうはいえハイフェもそろそろ限界だ。もう何十人と違う種類の幻を作っているのだから当然だ。

「よし。ハイフェ、このフロアの幻を消していいぞ。」「え？！でもそれじゃ……」

「いいんだ。どうやらシルフィーの方に敵があつまっているらしい。

「なんで？」

「蝶だよ。さつきとばしたやつ。全然帰つてこないだろ？きっと何かあつたんだよ。だとしたらこっちに大量の兵が来る」とはまずない。

「えっ？！でもそれって……。」

「うん。シルフィーがあぶないかもね。」「いいの？！」

「良くないよ。だけど今は信じて、今やるべき仕事をやらなきゃ。」「そう……だね。じゃあ魔法を解くよ！――」

「周りは見といたけどやつぱり兵は居なさそうだからいいよ。」
バアチイインという何かがはじけたような音がした後元通りの静けさが戻った。ただそこに居るはずの罪人と称されていた人間が居ないことを除いて。

「体は大丈夫か？」

「うん。思つたより魔力は消費されてなかつたみたい。少しだらいけどまだまだ幻を作れるよ。」

「じゃ、このフロアのやつらは順番に上にのぼつて、兵がいるか確認が済み次第第一人ずつ周りに悟られないようにうまく逃げてくれ！」「了解」。

さて、このフロアのやつは逃がした。後残つてるのは……

「地下4階に行きますか！」

「あと2フロアくらいなら大丈夫。早く行こう！ヘルゼー兄ちゃん

！！」

「そーだね！」

再びヘルゼーとハイフンは走り出した。

暗くてよく見えないが、そこには金髪の長いウエーブをした豊かな髪の女性が居た。鍵が開いていた。中に引きずり込まれた。

「ありがとう。でも、どうして助けてくれるの？？

「どうしてですって？私たち助けてくれるんでしょう？」

高く澄んだ声、暗くてもわかるほど肌の色が白く瞳は茶色だ。

「助けてくれないの？」

「いや、そりや助けるけど……。」

「だったら協力する。偶然だけどあなたが捕まる時にたまたま腕がこの牢に触れたの。そのときに錠が開いたのよ。」

「じゃあ今開いたわけじゃないのね。驚いた。この牢に触れた記憶が無かつたもの。」

シルフィーは密かにヘルゼーの仕業かと期待したのだが違つたようだ。

「そうでしょうね。あなたが触れたときは気を失つていたから。わたしはアリア。メウス・アリアよ。」

「初めましてアリア。私はシルフィー。時間が無いわ。あなたを助けるにしても、このフロアに人達をここに集めなければならぬし。」

「心配しないでシルフィー。ただ助けられるだけじゃお荷物になると思ってこの監獄に捕まつている人達のほとんどの人はここにいるわ。」

シルフィーはきつ、いていなかつたが、目が慣れてきてようやくわかつた。アリアの後ろには50人ぐらいの人達が集まつていた。

「牢に入つていなくてばれないの？」

「あなたが監獄守との試合を受けてくれたおかげで兵が手薄になつてているの。」

「誰が全員の鍵を開けたの？」

「あなたの残したほのかな魔法の痕跡を見たら光の守護魔法だつてわかつたの。それよりシルフィーあなたひどい怪我ね。回復魔法は使えないの？」

「残念ながら。」

「私も得意なほうじゃないから傷は治せないわ。一応出血だけ止めてあげる。あなたの血が敵に場所を知らせてしまうから。ただ傷自体は治つてないからあとでちゃんと手当てしてね。」

アリアはそういう終わると光の玉をだしそれから小さな螢のような発光体をシルフィーの傷にめがけて飛ばした。みるみるうちに出血はおさまり、深く切れたシルフィーの肩の肉があらわになつた。

「痛々しくて見ていられないわ。本當なら完治させてあげたいけれど……。」

「充分よ。ありがとうアリア。」

「一つお願いがあるの。シルフィー。この監獄の最深部に一人のおじいさんが捕らえられているはずなの。その人をここに連れてきて欲しいの。」

「なぜ？ここは女の監獄では？おじいさんなら男の監獄のほうに入られているんじゃないの？」

「いいえ。そのおじいさんだけは特別なの。この街にとつてとても大切な人なの。詳しい話をしている暇は無いわ。会えばきっとわかるから。」

「わかった。」

「気をつけて、どこにどんな仕掛けがあるかわからないわ。」

「いろいろありがとう、アリア。きっとおじいさんをつれてここに戻ってくるわ。」

「ありがとう、シルフィー。」

感謝の言葉を聞く前にすでにシルフィーは牢を出していた。あまり長い間同じところにどまるのは危険だと考えたからだ。幸い近くに兵士は居ないので先程の階段を急ぎ足で下りていった。急ぎ足で進むが、足音はなるべくたてないように慎重に一步一歩刻んでゆく。2・3分降りつつ、け、ようやく最下層にたどり着いた。身も凍るような寒さと静けさ。何の音も気配も無いまるでその階だけ時が止まり動くことを忘れてしまったのかと思う程異様な空間だつた。明かり用の玉まで無いので真つ暗だ。本当にこんな空間に人など居るのだろうか、と疑つてしまつほどだった。

「明かりよ、照らせ。」

呪文を唱えなくても明かりを指先に灯す事などシルフィーに取つては簡単なことだつたがなぜか唱えてしまつた。シルフィーの勘だつたのだが、唱えなければ魔法が使えないような気がしたからだ。

指先にほのかな光が輝いた。以外と広い空間だつた。兵士の居る気配はまったくしなかつたのだが一応念のために激しい光の使用は避けた。

ニシノニシノニシノ

シルフィーのブーツが地面を踏みしめる音だけがその空間に鳴り響いた。極度の寒さのためか、その場の異様な空間のせいいかはわからぬがとても息苦しく、いつのまにかシルフィーは肩で息をしていた。

「誰か……おるのか……？」

急にこれが

急にしゃがれか声が聞こえてきたので思わず飛んで逃げてしまふ。しかし、その間に、人といふ氣配なんてまるでしなかつたのに……。

おお、此がどうなつてゐるかな……

「おれ」

「はは…… そうじやの。ところでお嬢さん、何故こんなところへ来たのじや……？ 今日はなんだか兵も、こゝの空氣もだわつておる

「えい、あはいお助か」参つま。」

「ほほ……、『冗談を。年寄りをからかいつもんじゃないぞ……。』」

「冗談ではありません。上の牢にいるアリアという女性に頼まれま
る。

「アリア……、アリアとな?なるわ。な?な?」

「カトレア・シルフィーと申します。」

「え？」

「何、これが何の話じや。とにかくシルフィー。ワシをどうすゆつも

「どうあう

「そ、うか。

そこへして老人は牢の奥から現れた。その老人の姿にシバノイーは驚きを隠せなかつた。

「あ……あなたは？！」

「騒ぐな、上の兵にきつ。かれでは元も子もないじゃね？！」

髪は短くちじれてはいるがしっかりと生えていて色は白、憔悴しきつてはいたが意志のある強く優しい灰色の瞳。単なる老人ではなかつた。前町長だ。

第1-3話　闇に墮ちた街、光を愛する者　～5～（前書き）

大変更新が遅れて申し訳ありませんでした！！

驚きを隠せないシルフイーに対しても、実に穏やかな眼差しで前町長はたたずんでいた。

「アリアから頼まれたんじやうつて早く

「もしかしてアリアさんってあなたの孫娘さんですか？」
こんな緊迫した状況なのに、シルフイーにはそちらのほうが気になつていていた。

「左様。アリアは私の実の孫娘じや。」「と、こいつとは今の町長は……。」

「まじとに勘の鋭い娘さんじや。まさしく、現町長はわしの娘じや。恥ずかしながらの。」

「なぜこの町はこんなこと……。」

「なに、簡単なことじやよ。わしが悪いんじや。仕事に惚けて幼い頃なかなか一緒に遊んでやれなかつたんじや。せつと寂しかつたんじやうつ。そのうつり“影”と遊ぶよくなつたんじや……。」

悲しそうな顔をしながら前町長は語る。シルフイーは警戒を怠る事無くその話に耳を傾ける。“影”と遊ぶとはどううつことなのだろう。

「あの、影で遊ぶつてどううつことなのですか？」

「影と遊ぶとこいつとはじやな、簡単に言つと自分の影に帝国の使者を憑依させるよくなことじや。」

「すると、どうなるのですか？」

「影は自分の足元を離れないのだが自分とは違つた動きをするのじや。子供には不思議な現象じやうつ。自分の行動とは真逆の動きをするのだから。」

なるほど、とシルフイーは思った。興味本位の子供にはいい遊び道具に確かになるだうつ。

「でも、それは……。」

「左様。あなたの考へてるとおりじゃ。他人の闇をおろすわけじゃから、自分の闇も大きくなつてしまつ。連鎖反応のよつこ。そしていつかは自分の心は闇に食い潰されてしまつ。」

「じゃあ今彼女の心は……。」

「いや、まだ闇に食い潰されてはおらん。見つけたのが早かつたのでな。即座に禁止魔法をかけた。ただ闇をおろしていたせいじゃろ。闇が一番正しいと思つていてる。」

「じゃあまだ救えますね。」

シルフィーは気丈にいった。

「なんじゃと?」

「浄化魔法は試しましたか?」

「いや、それがこの街にはそんなに強い浄化魔法を使える者がいくなくてな。一番簡単な浄化魔法しかかけておらんのじゃ。情けない話じゃうわ。」

シルフィーは静かに首を振つた。

「そんなことはありません。浄化魔法は、様々な魔法のうち一番難しい魔法です。力のある者でも適性により使えない術者も数多くいます。だから、あまり御自分を責めないであげてください。」

「ありがたい。あなたは使えるのであるわ。適正に關しては申し分ないばずじゃ。」

「使えます。それより少しあなたに聞きたいことがあるのですが……。」

「何じゃ?何でも言つてくれ。力になれることは何でもいたそつ。」

「失礼ですがあなたの髪が白いのは、年齢によるものですね?ああ、あくまでも確認なので氣を悪くされたら申し訳ないのですが……。」

「もちろんそうじゃ。大丈夫わしは闇に巣くわれてはおらん。瞳を見れば分かつていただけるだろ?つか?」

シルフィーは瞳を覗き込み確認し安心した。大丈夫だ。彼は清淨な

田をしてくる。

「申し訳ありません。罠では困りますので。ここで捕まってしまうと全でが無駄に終わってしまいますので。」

「分かっているとも。なに気にしてなどおらさんよ。安心なされ。」

「やつにえはあなたのお名前を聞いていませんでしたよね?..」

「おお、忘れておつた。いや、年を取るとはいやじゃの。わしの名はベルギンじや。」

「ではベルギンさん、参りましよう。アリアさんが待っています。」

「そうじやの。」

ベルギンを檻から出しシルフィーは階段の様子を確認しに行つた。大丈夫そうだ。兵士の声などが聞こえないから少なくともこの付近にはいないようだ。

「大丈夫そうじやの。」

「ええ。行きましょうか。」

二人は階段を上り始めた。シルフィーが一三三段前を行き安全を確認してはまた上るという作業を繰り返した。

それと同時にシルフィーは驚いた。なぜならシルフィーは階段をものすごいスピードで駆け上がつてているので、当初はベルギンを一時安全な牢屋の近くにいてもらう予定だったのだが、同じようなスピードで彼もまた階段を駆け上り始めたのだ。しかも足音をうまく消しながら。どう見てもベルギンは七十を過ぎた老人だ。普通に考えて無理だ。

「すうじいですね。そのご高齢でこれだけ走れるなんて。」

「ほ。昔はもつと早く走れたのにのう……。仲間と修行に励んだ日々を思い出すわい。」

なるほど、そういうことか。とシルフィーは思った。彼もまたきっと町長になる前の若かりし頃に町を闇から守れるようことに訓練に次ぐ訓練を重ねたのであらうと容易に想像できた。

第14話 間に墮ちた街、光を愛する者へ

警戒しながら進んだ割には早くアリアの場所に戻つてこれた。これも、前町長の若かりしころの訓練のたまものだらう。今はそのことにただただ感謝しつつ、アリアに声をかけた。

「アリア！連れてきたわ！」

「シルフィー？！」

アリアは驚いていた。やはり彼女もこんなに早く帰つてくるとは思つていなかつたのだらう。当人も驚いているぐらいなのだから当然だ。

「こんなに早いなんて……。あなたにまかせて正解ね。」

「いいえ。私もこんなに早く帰つてこれるなんて思つてなかつたわ。全てこのベルギンさんの基礎体力が高いおかげ。」

「町長様っ！」

「お怪我はされておりませんか？」

町民からあがつた数々の声はみな町長を気遣う物ばかりだつた。いい街だつたんだなとシルフィーは現町長に代替わりするまえの街を想像していた。こんなにも心配されるほどベルギンは人望があるのだからよほどよい街作りをしてきたに違ひない。ただ私腹を肥やす能なしの輩だとしたらあり得ないことだ。

「皆の衆、あまり声をだしてはならぬ。気付かれてはもともこもな

くなつてしまひ「じやる。さあ、ゲートから逃げるのじや。」

そうこうとベルギンは手を空中に伸ばして街の裏道と思える場所と牢獄とをつなぐ道をつくりだした。

「す、」「……。」

シルフィーは思わず口ばしつた。空間を繋ぐ魔法は上級者でないと使えず、大量の魔力を消費する。ベルギンのような高齢者が玉無しで使えるような代物ではないのだ。一体彼の実力はどれほどものだろうか、と不思議に思つてしまつほどだつた。

そしてベルギンは振り返りながらシルフィーに言つた。

「本当に何から何まですまなかつたの。ありがと。わしらはもう大丈夫じや。連れがいるんじやろつ？早く行つてやらんと。わしらは街の中にある店の地下に抵抗軍のアジトにもどるとするかの。それから……。」

そつ言つとベルギンは一息置いてシルフィーに言つた。

「我が娘のことは気にせんでよい。」

思わぬ事を言われ、シルフィーは驚いた。

「え？」

「あんたさんは先を急ぐ身じやろ？本当はこの街なんて通過するだけに過ぎん街のはずじや。それをこんなに時間をかけて町民を救つてくれたんじや。それだけで充分。我が娘を浄化する浄化魔法なんて使つとつたら、またしても多くの時間を費やすことになる。娘の

「ことほわしらでなんとかする。だから連れを見つけてほむつーの街から出なさい。」

「どうしてその事を……。」

シルフィーの身の上を知っている人なんていないはずである。そう、あの裏山の花畠を管理している叔父さんだけのはず。シルフィーには訳がわからなくなつた。

「昔の修行仲間にお前のじいさんが居たよ。」

その一言でシルフィーは全て理解した。

そしてベルギンは涙を浮かべて言つた。

「すまないねえ……。あんたらの力になるどころか足を引っ張つてしまつて。あんたら一族に世界はたよりきりじや。無力な我らを許してくれ。」

アリア達他の町民はベルギンが涙ぐむ様子を見てとまどつていた。その様子を見るにシルフィーの家の事情を知つてこるのはベルギンだけのようだ。そしてシルフィーは優しく言つた。

「ベルギンさん。私達はそれが使命です。そのために生まれてきたのだから。私の祖父母のことも仕方ないのです。だから、もう行ってください。いつか、娘さんも必ず浄化してみせます。」

それを最後にベルギン達は牢獄から去つて行つた。

「さてと……。」

感傷にひたつている暇はない。早くヘルゼーにあわなくては。ベルギンを探すついでに走り回ったおかげで、この牢獄は2つの塔のようなものでできており、一度地上の高さのところで塔と塔を繋ぐ回廊があるようだった。とりあえずシルフィーは警戒しながら階段を登った。

と、本当に唐突にクリーム色の髪をした少年が顔を出した。小さな男の子をつれている。見た目8才ぐらいだろうか。とても利発そうな顔をしていた。

「シルフィー？！」

ヘルゼーはシルフィーに気づいた。

「どうしてこんなとこ……？」

「走つて……」

ヘルゼーはシルフィーの言葉を遮つて叫び、こちらに向かつて走ってきた。よくみれば後ろにはたくさんの兵士を連れたレイラがいた。

「いたぞ……！」

走ってきたヘルゼーと合流して出口への道を探そうとした。が、ヘルゼーはもう出口を知っていたらしく、シルフィーの腕をつかんで走った。

「いらっしゃだー急いでーー！」

兵士の足音とレイラの怒号が聞こえる。全力で逃げる。全力で追う。

シルフィーの長い黒紫色の髪がレイラの指先に触れようとした瞬間、ふたりは光に包まれた。

まず、耳に入るのは規則正しい機械音と自分の荒い息遣い。こんなにも走ったのは初めてなんじやないかというぐらいに自分の体に疲労感が広がるのを感じながらシルフィーは隣にいる少年を眺めた。隣にいる薄いクリーム色の髪と透き通るような青い瞳を宿した少年もシルフィーとあまり大差ない状態だった。

「大丈夫？」

とりあえず、確認とでも言つかのようシルフィーは質問した。

「もちろん。まだがもしてないよ。」

と、ヘルゼーからの元気の良い返事が返ってきたのとほぼ同時に一人の兵士が牢獄から現れた。

「ほひ、この牢獄から簡単に抜け出したか。流石と言つべきかなんと言つが。」

明らかにこの町のほかの兵士とは違う雰囲気を纏う彼に、シルフィーは警戒心を強めた。

「あなたは？」

「もちろんこの町の単なる兵士ですよ御立派な魔道士さん。」

そういうい終わるか終わらないかの刹那、兵士は突然剣を抜きヘルゼ

ーに襲い掛かった。否。かかるうとしたがシルフィーにより阻まれた。

「止まれ！！」

シルフィーの指の先から出た白い光によつてその兵士はまるで石像のように動かなくなつた。

「こつたこどりこつこと？！」

わけがわからないといつた様子のヘルゼーがシルフィーにたずねたところの答えは意外なところから返つてきた。

「当然……かな。ヘルゼー、表向きの支配者が一番強いとは限らな
いって事をよく頭に入れといて。もちろん本当に一番強い場合もあ
るけどこの町は違つたみたいよ。」

シルフィーが言い終わる前に先ほどの兵士と似たような雰囲気をか
もし出している兵士が、5人ほど現れた。
と、そこに先ほどまで牢獄の中にいたレイラが姿を現し先ほどの口
調と同じように兵士に命じた。

「もう、終わつたんだ。これ以上追いかける必要は無い。逃がして
やれ……。」

しかし、兵士は誰一人としてレイラの命令に従つてはゐない。逃がして
いなかつた。

「おい！聞いているのか？！」

レイラが5人のうちの一人の服の袖を引っ張ろうとしたそのときだつた。

「この町で一番強いのは、お前じゃねーんだよーー！」

そういうて先ほど服の袖を引っ張られた男がレイラの額に中指を押し出すようにあてた。その瞬間、レイラはいとも簡単にその場に倒れて自由を失つた。口からは泡を吹き、全身が激しく痙攣しているところから見て、神経にダメージを直接与えたのだろう。

「こいつら……帝国直属の部下だーー！」

最初に声を発し身の危険を知らせたのはシルフィーだつた。そして、5人の兵士たちはへラへラと笑いながら斧を片手に近づいてきた。

「おねえーちゃん、やっぱりあんた頭いいなあーー！」

言つと同時に持つていた斧を振り下ろした。シルフィーは紙一重でそれによけると、いまだ呆然として現状を把握し切れていないヘルゼーの腕をつかみ全速力で走り出した。

「逃げられねーぜーおれたちからはあーー！」

レイラもなかなかの手練れだつたが、こいつらとは比べ物にならない。いくら一般兵とはいえ流石直属。鍛え方がまるで違う。こんなやつらを5人も一度に相手していたら流石のシルフィーでも自身が危ないことは容易に理解できた。あとは、ヘルゼーを奮い立たせ自身の力で走つてもうつかない。幸いにもシルフィーが適当に走っていた場所は、その町の出口に当たる門へと向かう道だつた。

「ヘルゼー……しつかりして……あなたを抱え込んだままじゃ早く走れない……」

シルフィーの声により、ヘルゼーはようやく自分のなすべきことと、現状を把握した。

しかし、ヘルゼーが自分の足で走り出したのとほぼ同時に兵士たちからの攻撃も始まった。

流石、少数精銳といったところか。一人が魔法を使つたらしいのだがその規模の大きさが違つた。それは、ゆうに町ひとつを飲み込むまほうだった。今までしつかりと地面に張り付いていた影がゆらゆらとその姿を変え、シルフィーたちの方向感覚や、平衡感覚を奪つていく。

さらに、もう一人がその揺らめく影を人型に変え、実体無き兵士を無数に作り出していた。今では自分たちの影ですら刀を持って襲つてくるかのように思えた。

「実体のない相手とは戦つても無意味。視覚に惑わされないで、今ならさつきまで走つていたのと同じ道を基本的に走つているはずだから全速力ではしりぬけるわよ……」

シルフィーの声と共に今までにこんな速さで走つたことが無いような速度で二人は駆け抜けていた。途中何度も自分達の姿かたちをした影に襲われそうになつたがすべて紙一重でかわしひたすらに走つた。

そして、シルフィーの読みは正しかつたとヘルゼーは痛感した。この町の出口と思われるところから白い光がぼんやりと見えた。自分達の周りが夕焼けのように赤いおかしなもやに包まれていたからこそ見つけた小さな光。そこを指差し、ヘルゼーは叫んだ。

「シルフィー……あそこだ！」

「何が？！」

「出口だよーほらー光！」

シルフィーはヘルゼーにいぶかしげな顔をしてみせたが、自分にもわかったようで、コクリとうなずくと最後の力を振り絞つて走った。

第14話 間に落ちた街、光を愛する者へ（後書き）

更新が大変遅く更に不定期で申し訳ありません。

これからもこのような事態が予想されますが気長に待っていて頂けると大変ありがとうございます。

これからも描き続けていくのでよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7185a/>

君と湖で…

2010年12月9日05時03分発行